
欠けたままの月

委員長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

欠けたままの月

【Nコード】

N7076X

【作者名】

委員長

【あらすじ】

異形の住む山の近くの村に生まれた青年の成長ストーリー。

ブローグ 村を守る剣（前書き）

筆者の初めての作品となります。物語の青年と共に成長していきたいと思っています。誤字脱字もあると思います。感想、アドバイスなどありましたら是非お願いします。

ブローグ 村を守る剣

ガキンッ！

髪の白くなりその顔に皺のある老人と若々しい青年が剣を打ち合う。

岩から削りだされたような無骨な刀身を持つ大剣を構える青年に対し、老人が構えている剣は薄く伸ばされた鉄を刀身に持っている。普通なら打ち合いを避けるべきであるのだが、老人はそれに付き合っている。

なのにもかかわらず、老人の剣が欠けたりすることはない。老人は勢いの乗った青年の剣と打ち合っているのだが、体勢を崩すこともない。

これは彼らの間に大きな力量の差があることを示していた。

「どうした？ 今日何も出来ずに打ち合いが終わってしまうぞ」

「うるさい。老いぼれ。今に、見てろよ」

老人にはまだ余裕が感じられるが、青年の方は息も絶え絶えである。定められた時間や青年の体力的にも次の打ち合いが最後になるだろう。

青年は緩慢な動作で大剣を振り上げ、そのまま斜めに切りかかった。が、次の瞬間には剣は手から離れ、後頭部に衝撃が走っていた。

「今日はここで終わりじゃ。もっと精進せんと村は守れん」

青年は薄れる意識の中で、老人の声と剣を鞘に収める音を最後に聞いた。

青年は物心ついた頃から既に修練を受けていた。青年の生まれた村を守る剣として育てられていたのだ。父親は、既にその役目の真っ只中であつたため、修練を担当するのは専ら祖父の役目であつた。太陽の昇る方にある山には、異形が住んでいる。村を守る剣は、代々受け継がれ、その山の異形から村を守る役目を負っていた。青年はその一族の末裔であり、修練を欠かすことはできない立場にある。

青年が目を覚ますと、見慣れた藁の天井がある。身体を起こすと、後頭部に鈍い痛みが走る。どうやら気絶されられてからあまり時間はたっていないみたいだ。

「もう起きたの。まだ治癒をしていないのだけど」

声のするほうに青年が顔を向けると、金髪の少女が横であきれた顔をしていた。

「サヤの治癒は荒っぽいから遠慮しとくよ」

「そんなこと言わないで、練習に付き……じゃなくて治癒を受けなさいよ」

サヤ、と呼ばれた少女は青年を捕まえようとするが、青年は、それをスルリとかわして外に出て行つた。

「ケン！ちょっと待ちなさいよー！」

「ちょっと村の周りを走つてくるだけだからー！」

そう言つて、止まる気配を見せないケンを追うのを諦めたサヤは家の中に入つていった。

剣には鞘が存在するように、村を守る剣にも「鞘」がある。いかに修練を重ねた「剣」でも、傷を負うことがある。その傷を「鞘」が素早く癒すことで少数で村を守ることを可能にしているのだ。

「鞘」は、代々受け継がれる村を守る剣とは違い、水の下級精霊である「治癒の精霊」と契約できた者が選ばれる。水の下級精霊である「治癒の精霊」は無数に存在し、その数だけ契約する方法がある。運良く精霊と契約できた人は、村を守る剣の「鞘」になる。

そして一対となった「剣」と「鞘」は本来の名前を呼ばず、お互いをケン、サヤ、と呼び合う。そうやって、信頼を深めていき、村を守っていくのだ。

既にこの村には四組の剣と鞘がある。青年と青年の父親と叔父、そして青年の弟である。叔父に子供はおらず、しかもまだ青年とその弟は実戦には参加できないので今のところは父親と叔父が交代制で村を守っている。そのうち、青年と弟が成長すれば全員が戦えるため一人当たりの負担が減るのであるが、青年の様子を見る限りまだまだ先の話になるだろう。

1話 剣と弟

青年は今日、朝早くから祖父に呼ばれ、修練場に行くことになった。今日は祖父が定めた手合わせの修練の日のようだ。

三十日周期でやってくるその日は、青年にとっては憂鬱な日であった。

「今日こそは勝ちなさいよ。いつまでも弟に負けてちゃ格好悪いんだから。」

「わ、わかってるよ……。」

手合わせの修練は、祖父が考え出したものでその内容はいたって簡単である。青年とその弟で、実戦のように戦うだけだ。その時使う武器も、修練用の武器など存在せず実戦で使うものを使用する。

致命傷となりそうな攻撃が放たれた場合、祖父がその場で止めるつもりのようなのだ。

まだ、そんなことになったことは一度もなかったが。

ケンとサヤが修練場に向かうと、既にそこに一組の剣と鞘がいた。青年によく似た顔をしたまだ幼さを残す少年と、青年より一回り程大きな男が立っている。

「おはようございます。ウォルト兄さん、ノアさん。」

少年がその青い髪を揺らしつつ、頭を下げて挨拶する。ノアさん、と呼ばれた金髪の少女は少年に微笑みつつ答えた。

「おはよう、グレイツくん。バルドーさん。」

「ああ。」

それに続いて青年が無愛想な返事を返す。どうやら手合わせに向けて集中しているというわけではなく、ただ単に少年のことが気に入っていないだけのようだった。

しばらくした後、少年の横にいたバルドーさん、と呼ばれた男が反応した。

「お、やつときたのか！元氣かお前ら！」

「はい。バルドーさんも元氣そうですね！」

「ああ。」

元氣よく反応した男に元氣よく返事を返すノアに比べて、ウォルトはまたしても反応が薄い。

グレイツの鞘であるバルドーに対しても対応は同じのようだ。ウォルトを除く三人が歓談していると、白髪の老人がこちらに歩いてくる。

「あ、おはようございます。リフ様。」

「おはよう。リフさん。」

「おはようリフ爺。今日も元氣そうだな。」

「よお、じじい。」

それぞれに違う反応をして、四人はリフの言葉を待つ。リフは一人

ずつ眺めた後、口を開いた。

「揃っているようだな。これより、手合わせの修練を始める。」

リフがそう言い終わると、ウォルトとグレイツがそれぞれ武器を手にとった。

ウォルトの手には、いつもリフとの修練で使う自分の身の丈程もある大きな刀身の剣が、グレイツの手には刀身の短い剣が二本握られている。ノアとバルドーはリフの隣に座って観戦する体勢をとっている。リフは大きく息を吸うと、

「始める！」

と、声を上げた。

ウォルトが剣を構えているとグレイツは既にウォルトに向かって走り出しており、距離を詰めていた。

刀身の短い剣がウォルトに向かって走る。これから振り出しては間に合わない、と判断したウォルトは打ち合うことはせず後ろに跳んでなんとか避ける。そして、そのまま大剣を横薙ぎに振り払った。その一撃にグレイツはたまらず後ろに下がる。ギリギリでその一撃を避けたかと思うと、次の瞬間グレイツは振り切った隙を狙い全力で距離を詰めていた。ウォルトの右腕に切り傷が入る。続け様に振られたもう一振りの短剣がウォルトを襲う。さらにもう一筋右腕に傷が入った。

「ち……。」

「止め！あと九回やるぞ！」

リフが一旦手合わせの修練を止めた。ウォルトの右腕からはポタ

ポタ、と少しずつ血が滴っている。

一回目はグレイツに有利な状態で終わった。大剣を使うウォルトは隙が大きく、その瞬間に攻撃されるととても不利になる、ということをよく知った上でのグレイツの猛攻であった。

ウォルトの一撃の間合いをよく知っているグレイツにとって、当たるか当たらないか、というギリギリで避けることも容易だったようだ。

ウォルトとグレイツの二人は、お互いの鞘の元へ歩いていくとドサツ、と音を立てて地面に座った。

「治癒に五分ほど下さい。」

ノアはそうリフに言うと、目を瞑ってウォルトに向かって頭を下げるような体勢をとった。

そして、片方の手を傷にかざす。そのままの状態で三分程経っただろうか。ノアの手ひらが徐々に青い輝きを放ち始めた。すると、じわじわ、と血の出ていた傷口が青い輝きの強さに応じてだんだんと塞がっていった。

「ありがとう、サヤ」

「今はノアでしょ？それよりどう？治癒のスピード速くなったでしょ？」

言われてみると確かに早くなったな、とウォルトは答えた。

しかし、その右腕には血はついたままである。ウォルトは、リフに川に行ってくる、と言うとすぐ近くにある川に向かっていった。

2話 剣と叔父

ウォルトが川に着くと、その近くにいた長い尾を持つ鳥が空に羽ばたいていった。

この川は山から流れてきているが、異形の影響などは受けていないらしく、飲み水などとして使われている。下流には田畑が広がっている。川岸まで辿り着くと、川の中に右腕をつける。

ウォルトは腕の掃除を川の水流にまかせて先程の手合わせの修練の反省を始めた。

接近を許さないように立ち回るか、どうにかして剣の打ち合いに持ち込めばこちらにも分はある、と考える。だがしかしそれが難しいことだということも分かっている。どうすれば勝てるのだろうか……。

ふと、武器を変える、という考えが浮かんだが、すぐにその考えを捨てた。

今さら武器を変えたところで、さらに実力に差が出るだけでいい案だとは思わなかった。

それに、あの日の叔父の剣技を思い出せばこの大剣以外使う気にはなれなかった。

とても昔のこと、しかしウォルトは今でも鮮明に思い出せる。

その日はじとじと、と雨が降っていて昼だというのにまるで夜のように暗かった。

ウォルトはまだ幼く、短剣を使って修練をしていた。その短剣を背負って村の周りを走る修練をしていたのだが、一番山に近付いている地点でその声に気づいた。

声の主が「何」かは分からなかったが、およそ人間が出せるような声ではなかった。獣の類かと思ったウォルトはその声を無視しよう

としたが、初めて聞くその声への好奇心に打ち勝てずその声のする方へ向かっていった。

近付いていくにつれだんだんと大きくなるその声と共に、金属が何か硬い物とぶつかりあう音も聞こえる。木から木へと移りつつその地点に近付いて顔だけを出した。そこに広がる光景に、ウォルトは声を出すことも目を逸らすこともできなくなった。

そこには大きな剣を持つ叔父と異形がいた。異形には、筋肉のような盛り上がりのある褐色の足が四本、ずんぐりとした胴体と思わしき部分から生えていた。前足には石のようなものが一定間隔で埋め込まれていて、胴体に近付くにつれその間隔は狭くなっていた。後ろ足の後ろ側には燃えるような赤色の毛があり、ゆらゆら、と揺れていた。

ウォルトが胴体から上を見ようとしたときには、異形はもうその場所にはいなかった。

その代わりに、何か硬い物が砕け散る音とずしゃっ、という肉が引きちぎられるような音が聞こえた。

次の瞬間、ウォルトの目の前に見覚えのある物体が飛んできた。それは、一定間隔で石のようなものが埋め込まれている先程見た異形の前足だった。

ウォルトは、血のような液体を噴き出しながらびくびく、と痙攣している足を見て、

「ぎゃ ああああああ。」

と、悲鳴を上げてしまった。次の瞬間、目の前にきらり、と光る物体と大剣がありウォルトは腰を抜かした。さつきからずっと聞こえていた異形の声を一番近くで聞くことができた瞬間であった。

異形のずんぐりとした胴体から、よく見かけるような力マキリの上

半身が生えており、カマキリの象徴であるカマが上半身から二本生えていた。目の前で光っているのはそのカマだった。

さらに顔には赤く大きな目が三つあり、爛々としていた。鋭利な輝きを放つかまと、叔父の大剣がギリギリ、と音を立てている。叔父はそのまま大剣を押し切つて、異形の体勢を崩すことに成功する。

前足の無くなった分、上手く力が出せないようだ。そのまま切りかかる大剣に異形は片方のカマを合わせようとするが、ぶちっ、という嫌な音と共に異形のカマは遠くに飛んでいった。

そのまま、異形は大剣の一撃を受ける。が、勢いが殺されていたのか、致命傷を与えることはできなかったようだ。異形が悲鳴のような、興奮したような声をあげる。叔父はそんな異形にさらに一撃を加えた。その一撃を受けた部分が凹んで、じわじわ、と血が出ている。叔父は動きの鈍った異形に向かって、大きく剣を振り上げて勢いよく振り下ろした。

異形の顔面がぐちゃ、と音を立てて、なくなった。頭を失った異形は音を立てて倒れた。

ウォルトはその光景をスローモーションで見えるように見ていた。顔を上げると、困ったようにこちらを見ている叔父と目があった。

「大丈夫だったか？」

そう優しく問いかける叔父に

「ありがと、おじさん」

と、ウォルトは答えた。叔父はウォルトに対して怒りはしなかった。それが幸いして、ウォルトは気を落ち着かせることが出来た。落ちて着くと、先程の好奇心がむくむくと膨れ上がってきた。

「おじさんおじさん、今のが、いぎょうですか？」

「そうだぞ。足が八本、手は四本あったんだぞー」

冗談のようにかえす。しかし、その話は本当でウォルトが辿り着いた時にはもう半分の手足しかなかったのだ。

異形が、悲鳴を上げたウォルトに悪あがきのように向かっていたのもそういう理由からだったようだ。

ウォルトがその好奇心を満たすと、右腕から血が出ていることに気付いた。手合わせの修練の怪我と一致したその光景がウォルトの意識を今に引きずり戻した。川で洗われたその右腕の血はすでにきれいになっていて、切り傷などなかったような自分の肌が見える。

「よし、そろそろ戻るか……」

ウォルトは溜息を一つついて立ち上がり、叔父の剣技を思い出しながら手合わせの修練の場所に向かっていった。

手合わせの修練が始まってから、ずっと負け続けていたウォルトだったが、今回もその例に漏れず、一勝もできないまま手合わせの修練が終わるのであった。

3話 剣と雨

長い雨が降っていた。雨が降っていると修練は休みになる。

それでも、ケンは体を動かしたくてまた村の周りを走りこんでいた。雨を吸った衣服は重く、ふくらはぎのあたりにまで泥が撥ねているが、そんなことは気にせず黙々と走る。動いていないと頭の中で悪いことばかり考えてしまいそうだった。

一向に縮まらない祖父との差、今も気を抜かずに村を守っているであろう父親。こんなことばかり考えてしまうのは雨のせいだろうか。

「もっと強くなりたい」

誰に言うでもなく呟いて、ケンは自分の意思を確かめた。

家に帰ると濡れた体を拭くための布が履物を置く場所の一番上に置いてあった。おそらくサヤが用意してくれたものだろう。その布を取りつつケンはサヤに声をかける。

「ただいま、サヤ」

「……」

ケンが声をかけるが、サヤの反応はない。正座をしつつ、うつむいていてその表情はよく見えない。

「寝てるのか？」

そう言いつつサヤの肩に手を置くと、サヤは体をびくつ、と震わせた。

そのまま顔をあげて咎めるような目でケンを見つめた後、ため息をついた。

「驚くから急に現れないで」

「何してたのさ」

ケンは別に急に現れたわけではなかったが、サヤが怒っているのがわかったので訂正したりはしなかった。

「精霊を素早く呼び出す練習をしていたのよ」

サヤは立ち上がって答えた。ケンは、練習の邪魔をしてしまったのだと気付くと申し訳なさそうな顔をしてごめん、と素直に謝った。ケン自身も剣の修練をしていた時に邪魔されたら不機嫌になるのが容易に想像できたからだ。素直に非を認めたケンに

「じゃあ私夕飯の支度をしてくるね」

と、言っただけで村で採れた野菜を片手に家から出ていった。その後ろ姿を眺めながら、明日の天気のことを考えるケンであった。

ケンが家に帰ってしばらく経つ。だんだん、雨が地面を叩く音が大きくなってきている。

ケンは、こりゃ、明日の修練もないだろうな。などと呟きながら立ち上がる。

どうやらごろごろして休憩するのに飽きたらしく、彼の愛用の大剣のほうへ歩いていった。もう長いこと使っているその剣は、重厚な作りでもらったときのままのような頼もしさがある。しかし、剣先が少し削れてしまっている。

あの雨の日の次の日に、ケンが父親に

「短剣じゃなくて大剣で修練がしたいです」

と、我俣を言っただけを聞いた叔父がくれたものだ。彼曰く、

「余っていたやつだから気にしないで」

と、いうことらしかった。

それからというもの、ケンはずっとその剣と共に修練を重ねてきた。もらった当初は、振ることはもちろん出来ず、背中にかついで歩くだけで精一杯だった。

ケンとしては、剣先を地面につけない努力をしたつもりだったが、いつの間にか剣先が少し削れてしまった。ケンの身長がそれらしくなってから、素振りを始めたのだが、これもまた大変なことだった。今では、手合わせの修練が出来るほどになったが、この剣を使い始めたのケンからすれば素晴らしい成長である。しかし、弟に勝てなかったり、このままでは村を守れないと言われたりしていたケンは、そのことに気付くことはなかった。焦りだけがケンの強くなりたい、という気持ちの糧の大部分であった。

ケンが何か今できる修練はないかと、試行錯誤しているとサヤが慌てた様子で帰ってきた。ケンは、ずぶ濡れのサヤに拭く物を渡しつつ、何かあったのか、と声をかける。

「さつき、川で野菜の泥を落としていたら、ケンの父親の『鞘』の人が応援が欲しいって言ってたの。グ
レイツくんはもう向かったみたいだから、ケンも急いで」

そうサヤが説明すると、ケンは愛用の大剣を背負って、勢いよく家から駆け出していった。

サヤもそれに続き山の方へ向かう。雨はさらに激しくなっていた。

4話 剣と邂逅

さらに強くなる雨の中、ウォルトとノアは川伝いに走った。

遠くから剣と剣がぶつかり合う音が聞こえる。その方向に進路を変えつつ、速度を上げた。

二人分のばしゃばしゃ、という足音に混じって、ウォルトが幼い頃に聞いたあの異形の声が聞こえるようになった。規則的に聞こえるその声が大きくなると、急に視界が広がった。

そこには、薙ぎ倒された木々と異形と対峙する父親の姿があった。グレイツがどこにいるかはその場所から見えなかった。

異形は遠目から見ると人間の姿に近かったが、よく見ると背中からも腕が二本生えており明らかに人間ではなかった。その足は骨のようなものだけで作られていた。脛にあたる部分の表面には無数の針が付いていてその先から水が滴っている。その骨の部分は腹の部分まであり、胸からは肉体になっている。

肩から伸びている腕は毛むくじゃらで、その手にはその剣らしき武器が握られている。

しかし、背中から生えている方には武器は握られていなかった。背中には無数の武器が刺さっていて、それが原因で背中の腕は機能していないように見える。顔には、大きく裂けている口と耳のような突起物があった。鼻に当たる部分には、二つの穴が空いていて、その上に何もない空洞の目があった。

頭頂部には白い骨があるようだ。異形の姿を確認して、ウォルトが剣を構えつつ父親に声をかけた。

「父さん、何があったんですか？」

父親は異形と対峙したまま答えた。

「気をつける。奴はのろいが、馬鹿力だ。俺が隙をつくるからその時に思いっきり叩き込んでやれ」

父親はそれだけいうと、異形に接近を始めた。父親はグレイツと同じく短剣を二本扱う型である。

対して、目の前の異形は、ウォルトが扱うような大剣を両手に持っており、その異常な膂力が窺える。

父親が異形の間合いまで入ると、異形の猛攻が始まった。と、いつでも剣を振るスピードは遅く、ウォルトでも目で追えるものだった。なぜ応援が必要だったのだろうか、とウォルトが思っていると、その理由はすぐに分かった。

父親の剣は先程から何回も異形に当たっているのだが、ダメージがまるで通っていないことに気が付いたのだ。骨の部分ではなく肉体の部分に攻撃が当たっているのに、ガキイン、という剣が硬い物にぶつかる音がしていた。

父親の剣を振るスピードはとてもはやくウォルトは目で追えなかったが、剣が当たったであろう部分に火花が散ったり、音がしているのどこに攻撃が当たっているか、ということ想像するのは容易いことであった。

そうか、もつと威力のある重い攻撃が必要なのか、とウォルトが気付いたとき、異形が片膝をついた。何をどうすればあの攻撃の通らない異形が片膝をついたのか分からなかったが、勝機であることは間違いなかった。

「いきます」

ウォルトは鋭く声を上げて、異形に向かって愛用の大剣を振り下ろした。が、そこにはびくともしない異形の姿があった。全力で振り下ろした剣は当たったことは当たったのだが、やはりガキイン、と

いう音と共にはじかれてしまった。

しかも、その振動が手に伝わりウォルトは剣を落としてしまった。手がビリビリ、として痛い。

そのことで判断力の鈍ったウォルトは、異形がその体勢のまま攻撃してくるとは思わなかった。

ウォルトの方に向けてゆつくりと振られたその剣にウォルトが気付いたときにはもう遅かった。今から避けようとしても避けられない。しかし、次の瞬間にウォルトは信じられないものを見た。

父親が、こっちに向かって振られている剣と合わせるように自分の剣を振り下ろしていたのだ。

両者の剣がぶつかり合ったとき、父親はウォルトを飛び越して吹き飛んでいった。ドサツ、という音と共に父親が地面にぶつかる。

父親の手首はありえない方向に曲がっていて、その腕の皮膚が所々破れているようだった。遠くでノアの悲鳴が聞こえる。

呆然と動かない父親を見ると、近くの草陰から父親の「鞘」が、駆け寄ってその体を移動させ始めた。一旦此处から離れて治療を行うつもりらしい。

ウォルトは一人で時間を稼ぐことを余儀なくされたのであった。

ウォルトの弟、グレイツがその知らせを聞いたのはウォルトよりすこしはやかかった。

その場にいたノアと一緒に応援が欲しいという父親の「鞘」の話を聞いて急いで山の方へ走り出した。

村の山側の出口には既にバルドーがいて、こつちだ、と告げて先行を始めた。それについていくと、森の開けた場所にでた。異形と戦っている叔父の姿がそこにあり、その顔は苦痛にゆがんでいた。見ると、片方の足を引きずりながら戦っているようだ。

「叔父さん、応援にきました。治癒を受けてください」

グレイツがそう叫ぶと、叔父はちら、と、こちらを見て

「頼む。時間を稼いでくれ」

と、グレイツに言って離脱を始めた。入れ替わりでグレイツはその異形の前に立った。

先程見た様子ではあまり速さはないらしい。避けることだけに専念すれば問題ないはずだ、と考え、グレイツは異形の攻撃を避け始めた。異形の攻撃を見切った少年は順調に時間を稼いでいった。

グレイツ達は知る由もなかったが、その異形はウォルト達の方に現れた異形と酷似していた。

違う部分といえば、グレイツ達の方の異形の背中には武器は刺さっておらず、鼻や目なども空洞などではなく人間と同じようなものがあつたぐらいだ。

「グレイツ、隙を作ってくれ」

少しして戻ってきた叔父はそうグレイツに言った。避けるのは楽だが、隙を作るのはどうだろうか、と内心想ったが、叔父の信頼に答えねばならないと思ったグレイツは

「わかりました。あぶなくなったら助けてくださいね」

と、言うのと避けるだけの動きから、異形の隙を突くように立ち回りを变化させた。

叔父はグレイツの剣の才能を信用していた。治癒を受けながら見ていた彼の動きは危なげなく、余裕があるように見えた。叔父はグレイツの戦いぶりを見ながらその瞬間をじっと待った。

グレイツは襲いくる四本の剣を避けながら試行錯誤していた。先程一撃だけ異形の肉体の部分に当たったのだが、結果は芳しくないものだった。ふと、グレイツの脳裏にある考えが浮かんだ。

——切って駄目なら突いてみてはどうか、と。

そう思いついた後のグレイツの動きは完璧だった。異形の剣を避けつつ、後ろに回りこんだグレイツは異形の片方の足を鋭く突いた。その一撃は異形の体勢を崩すことに成功し、大きな隙を作った。

あとは、叔父の仕事だな、と思ったグレイツが異形の間合いから身を引くと叔父が切りかかる瞬間が見えた。叔父の剣は異形の肩の部分から胸の辺りにかけて大きくめり込んでいた。

異形がその大きな口から断末魔のような叫び声を上げて倒れた。その体は大量に血を噴き出した後、砂のようになった。異形の成り果てのその砂にはもう雨が染み込んでいた。

「やはり、グレイツは優秀だな」

と、零す叔父にグレイツは笑みを投げた。

避けることで精一杯のウォルトは先程から何者かが話しかけてきているような気がして、目の前の異形に集中できずにいた。剣を拾いに行く暇もなく、逃げることは許されない。素手で避けることだけしかできないウォルトは体力、精神力の限界も感じていた。そんな状態が続き、ウォルトは異形の振る剣がだんだん早くなっているような感覚にとらわれていた。

異形の片方の剣がウォルトの腕のすれすれを通っていく。

「ぐっ……」

直撃ではなく、かすただけであつたが、ウォルトの腕の表面はズタズタになった。

痛みや、もっと大きく避けなければならない状況がウォルトの精神力をどんどん削っていく。

動きの鈍るウォルトに異形の振る剣が右足に直撃してウォルトは吹き飛ばされた。半ば広場と化していた場所からその端まで吹き飛ばされたウォルトは、木の幹に打ち付けられた。ガサガサ、と音がして、緑色の葉が上から降り注いだ。

ウォルトは一步一步確実に地面を踏みしめて近づいてくる異形の姿を葉の隙間から見た。もうすでに感覚のない足先と足の付け根から感じる激痛と、目の前で剣を振り上げる異形の姿を見て、ウォルトの精神は完全に擦り切れた。

「おい、小僧、いつまで無視するつもりだ！」

声が聞こえた。

5話 剣と盟約

「おい、小僧、いつまで無視するつもりだ！」

先程から聞こえていたような声が、はつきりと聞こえる。男のような、女のような中性的で、それでも威圧感のある声だ。ゆっくりとこちらに向かってくる異形の剣を見ながら、意識をその声に向けた。

「小僧、生きたいなら首を縦に動かせ。我と盟約と交わすか？」

ウォルトは、こく、と僅かに頷いた。ここで死んだら、周りの木の陰から見ているであろうノアにとっても嫌なものを見せてしまうし、まだ弟にすら勝てず、村を守る剣として一度も村を守れずに終わることになるのだ。そんなことは嫌だとウォルトは思った。

突如、異形の背中に刺さっていた一本の剣が怪しい光を放つ。

その真っ白な刀身が徐々に淡い桃色に染まる。その桃色が確かなものになるにつれて、異形の動きが鈍る。刀身が桃色からさらに濃くなり真紅になっていく。

突然、異形はウォルトの目の前で砂のように崩れて、ザーザー、と降る雨が異形の砂を濡らしている。砂と地面との境界線がわからなくなり、赤い液体がそれに混じる。

ウォルトが、砂に混ざっていく赤い液体を辿ると自分の足が見える。赤い液体の根源は自分の体だったのだ。ウォルトの右足は付け根から無くなっていて、その断面からは血が流れ出している。

積もる葉の隙間からも赤い液体が見えた。それ以上自分の血液を見たくない、と思ったウォルトがなんとか顔を上げると地面に無造作に落ちている真紅の剣が目に入る。

「主^{ぬし}、我は只の剣ではない」

そんなことはわかってるよ、と返そうとしたウォルトであったが、青くなつた唇は動いてくれない。血を流しすぎてくらくら、と揺れる視界で目の前の景色が色をなくしていく。

「これはいかな。盟約を交わした主が早々にして逝くのは我としても良しとするところではない」

真紅の剣はだんだんと色褪せていき、異形の背中に刺さっていたときのような白色となつた。

ウォルトからすれば、だんだんと色を取り戻していく景色の中で一つだけ、色の変わらない剣が落ちていただけだが。色の無くした剣がウォルトに語りかける。

「主はこれより人ではなくなつた」

ウォルトは耳を疑つた。目の前の剣は、自分がもう人ではないというのだ。

剣の言葉を反芻しながら自分の身体感覚が戻っていくのを感じた。右足の付け根から違和感がある。

その違和感がゆっくりと右足の付け根から大腿部へ移っていくことにウォルトは嫌な予感がした。

痛みに耐えながら視線だけを向けて確認した先程とは違い、今は軽く頭ごと動かせる。

そして、ウォルトは見た。自分の足が再生していくその異常な光景を。

言葉を失つたウォルトに剣が言う。

「異形の血を輸血した。感謝するがよい。主は、生き延びたのだ」

ウォルトには、輸血、という言葉の意味は分からなかったが、人ではなくなったということを告げられていることは分かる。人の体では、あの重症から生き延びることはおろか、無くなった部分が再生するということはないのだから。

ウォルトは、自分の右足が再生する様を見ながら、次にすべきことが浮かんだ。ノアのことを気にかかったのだ。ノアを探してキョロキョロしていると、見慣れた金髪の少女が背を向け、走っていくのが見えた。

ノアはその光景をじっと見ていた。だんたんと動きの鈍っていくウォルトが異形の一撃を受けて木まで吹き飛んだ時には思わず悲鳴をあげそうになった。それをぐっと抑えてウォルトの方に目を凝らす。

右足は一撃を受けた際にちぎれたらしく、なくなっていた。

ウォルトに近付いていく異形を呆然としながら見ていると、異形の背中に刺さっていた剣が光ったかと思うと、異形が砂になったのだ。その剣以外の武器は異形と共に砂になったようだ。

その場に、カタン、と真紅の剣が落ちる。何か起きたのか分からず混乱したノアだったが、ウォルトを一刻も早く治癒しなくては、と思い直して走り出した。しかし、木の根に足をとられて躓いてしまう。

「あいたた……」

つい、痛いと声を出してしまったが、木の根元でぐったりしている青年の痛みの方が大きいことは明白である。

ノアが立ち上がるうとしながらウォルトに目を向けると、ウォルトの足が再生しているのが見える。

ノアは、その異常な光景を目の当たりにして思考がぐちゃぐちゃに

なっていくのを感じた。

自分と対である「剣」は、違う生き物になってしまったように感じた。本能が、あれはもう人ではない、今すぐ逃げ出せ、と、命令する。ノアはウォルトに背を向けて走り出した。

ウォルトは、遠ざかっていくノアを見ながら、自分はもう人じゃないんだ、と再確認した。

6話 剣と別れ

ウォルトは落ちている白い剣を手に取り、話しかけた。

「なあ、俺は今何者なんだ？」

剣は何でもないことのように答える。

「主の血には、今、人のものと異形のものが交じり合っておる。我が先程の異形の血を主に与えたせいで半分異形で半分人間という訳だ。先程の異形は我の前の盟約者等がその命を落としてまでも封印した奴でな、その回復力は異形の中でも異常なものであった。封印の一部が壊れ、奴が動きだした時、我はこれを次の盟約者を見つける機会だと思い、その背中で息を潜めておったのだ」

あまりにも長い答えを返す剣に文句を言おうとしたウォルトであったが、この剣が異形を倒さなければ、この剣が自分に血を与えなければ、そのまま死んでいたのだ。

言わば命の恩人、文句など言う資格もない、と思ったウォルトは言葉が続けることができなかった。

「ところで、主よ。主は我と盟約を交わした訳であるが、何か聞きたいことはあるか？我の前の盟約者も初めの頃は、我に質問攻めをしてきおった。よって主も遠慮することはない。我は永く生きておるから、知らぬことはあまりないぞ」

白い剣はウォルトに問いかける。「盟約」という言葉の重みはウォルトも知っていた。

命果てるまでずっと続く約束のことを「盟約」と呼び、村を守る剣

と鞘の関係もそれに当たるのだ。

思い返せばあのときは正常な判断すらできない状態で、ただ、生きたい、と思ったウォルトは反射的に頷いたのだ。聞きたいことはたくさんあった。ノアを追いかけるか、この白い剣と生きるために話をするのか、ウォルトはしばらく考えて答えを出した。

「歩きながらでもいいか？」

「勿論」

白い剣はその中性的な声で簡潔に答えた。

森の中をゆっくり、自分が生きていることを一步步確認しながら村へ向かうウォルトは白い剣に問いかける。

「お前は何だ？さっきは只の剣ではない、とか言っていたが」

「いかにも。我は、只の剣でない。が、名も無い。我はただ、主と盟約を交わした剣だ。主は盟約により我の加護を受けた。否、人からすれば呪いと呼ぶだろうが。主を人でなくしたのも我の仕業だ。しかし主は、あの様な状態に陥っていたというのに、よく平常心を保っていられるな」

一つ聞けば十が返ってきて、尚且つ疑問も増やしてくれるこの白い剣に呆れてウォルトは溜息をついた。

剣としてはただ知っていることを説明したつもりなのだが、どうや

らウォルトはその話の半分程しかついていけてなかった。

「加護とは何だ？」

ウォルトは次々と湧き上がる疑問を一つ一つ解消していくことにした。ウォルトの歩く速度では村まではあともう少し時間がかかる。白い剣がその疑問達を一つ一つ解消していくように喋り始めた。

「主は我と盟約を交わした訳だが、その盟約の名を『血の盟約』という。我は、この身を持って主に仕えるつもりであるが、主には我にその代償として血を捧げてもらう。別に、どのような存在の血液でも構わぬ。元々、この世界で生きとし生ける者全てには血液がある訳なのだが……」

疑問を解消したついでに、白い剣はさらに話を続ける。あまりにも長すぎる白い剣の説明にウォルトがついていけなくなっていることにやっと気付いた剣が喋るのを止める。村が近付いてきていることに気付いたウォルトはまた今度ゆっくり聞くと聞いた。

ウォルトの視界に村の山側の出口が見える。それと同時にその出口に立っている複数の人々が見えた。この時、ウォルトはあまりにも遠い場所からそれを視認したのだが、彼はそれに気付けなかった。村の出口に立っている人々がウォルトの姿を認めると、皺のあり白いひげの長く伸びた老人が威厳のある声を上げた。

「それ以上近付くでない。異形に墜ちし者よ。今すぐこの村から立ち去れ！」

この白いひげの老人は、ウォルトが住む村の長である。

ノアが、ウォルトが欠損した体を再生している様子を見て逃げ出し、村長の家へ駆け込んだのだ。

そこには、グレイツやバルドー、叔父と叔父の鞘もいた。息も切れ切れにノアがそのことを伝える。

しかし、ウォルトが異形と化したことを彼らは既に知っていた。ウォルトの父親達が先に戻りその話をしていたのだ。それを聞いた村長は、ウォルトを追放することに決めた。

村長の決めたことに従うのがこの村での当たり前であった。

そして彼らは、ウォルトが来るであろう村の山側の出口で待つことにした。

村長やノア、弟達、叔父までもが揃って待っていたのを遠くから確認していたウォルトは、彼らが自分のことを心配して待っていてくれたのだろう、と思っていた。

それだけに、村に入るな。出て行け。と、言われたウォルトが受けた衝撃はとても大きかった。

時間を稼げ、と言われてそれすら出来なかった不甲斐無い自分と、確かに人ではなくなった自分、そして、傷つきながらも生きて帰ってきた自分が村から出て行け、と言われたということがウォルトの心をズタズタに引き裂いた。足を止めたウォルトは一言、

「お世話になりました」

と、だけ返した。今、彼に出来ることはそれが精一杯だった。そして、背を向け歩き出すウォルトを、村長達は眺めるだけだった。

7話 剣と決意

村から追い出されたウォルトは、少し歩くと川の近くに座り込んだ。降り続く雨が川の表面を叩いて、たくさんの波紋を生み出していた。もう太陽は傾いていて、すぐに暗闇に染まるだろう。

しかしウォルトは、そこから動く気配もせずに、泣き叫んでいた。もうすぐ止みそうな雨に混じって、大粒の涙がいくつもこぼれる。その場が完全に暗闇に包まれると、雨は既に止んでいたが、ウォルトはまだ泣いていた。

白い剣は何も言わなかった。そしてそのままその夜は過ぎていった。

泣きつかれて眠ったウォルトが目を覚めたのは日が高くなった頃だった。

ウォルトが体を起こすと、体にかかっていたであろう布が足のほうへずり落ちていった。

周りを見回すと、川岸にある大きな石の上に魚の頭が口を上に向けて置いてあった。村に伝わる安全祈願の印だ。村人の中で狩りを行う者の家の中にも同じ物が飾ってあるはずだ。夜中のうちに誰かが置いていったらしい。

「主、主は何を望む？これから何をして生きるのだ？折角盟約を交わしたのだ。直ぐに逝ってもらっては困る」

そばに落ちていた白い剣が言葉を発した。昨日からずっと黙り込んでいたその白い剣の声がやけに懐かしく聞こえた。剣の難しい問いにウォルトは答える。

「俺はこんな状況にしたヤツを許せない」

「左様か。我も人の生き血はあまり嗜んだ事がなくなてな。味を覚えるぐらいに殺してくれるのか？しかし、主がこの様な事を言うとはな。我の見込み違いであつたか」

白い剣が少し呆れたように返してくる。しかし、止めるつもりもないらしい。ウォルトが、口元を吊り上げつつ答えた。

「違う。世話になった場所に復讐するようなことはしない。俺は、こんな状況にした俺が許せない」
それは自嘲の笑みだった。その表情のままウォルトは続ける。

「俺は強くなる。強くなって、村を守る剣として生きたい」

「我は助力を惜しまぬ。主の剣となり、師となろう」

ウォルトは、短く交わされた言葉に盟約以上の頼もしさを感じた。

「先ず、主には一人で生きる事が出来るようになってもらわねば。我も安心出来ぬからな。主よ、人が生きる為には何が必要か分かるか？」

「食い物だ」

白い剣の問いにウォルトは答える。よく考えれば昨日から何も食べていないことに気が付いたが、何故か空腹を感じない。

「では、異形が生きる為に何が必要か分かるか？」

しばらく考えた末にウォルトは自信ありげに答える。

「人の肉か？」

異形が村を襲いに来る理由を考えればそれが一番ありそうだとウォルトは思った。しかし、白い剣の答えに眉を顰めた。

「半分正解で、半分間違いである。異形が本当に生きる為に必要な物は『魔』だ。『魔』は、世界中に満ち如何なる物にも存在している。そして、『魔』は宿った物と混ざり合っている。異形が求めておるのは人と混ざった『魔』だ。異形は村から漂ってくる人と混ざった『魔』の味を知って、求めておるのであるうな」

初めて聞く存在にウォルトは顰めた眉をそのままにして一人考える。もしかしてこの空腹感のなさは、自

分の体に流れる異形の血の力で魔を食らっているからなのだろうか。いよいよ人らしくなくなってきたな、と眉を戻して苦笑する。同時に、このように考えて苦笑出来る程落ち着いている自分を見つけて驚く。人は一人では生きられない。支えてくれる存在がいるだけでこんなにも気持ちになるのか、と。

「どうやら、俺は魔を食べているみたいだ」

「我も半分異形で半分人などという存在は初めて見た。その様な存在を造ったのは我なのだがな。我自身も驚いておる。拒絶反応を起こすかと思つたが、どうやらその様子もなさそうであるしの」

時々、ウォルトには理解できない言葉を含める剣の答えを気にする

ことなく、村を守る剣に戻る為に重要な事を聞いた。

「俺は人に戻れるのか？」

白い剣は少し考えて答える。

「初めての存在である為、現実とは言えぬが、異形の力を使わなければ人に近付くことは出来よう」

白い剣の言葉に少しの希望を見出したウォルトだったが、生き残らねば話にならない為、これから生きる為に何をすればいいのか、ということに集中することにした。

「これからどうすればいい？」

「そうだな。主には先ず、剣の腕を磨いてもらおう。この山の頂上を目指せ。初めのうちは無理だろうから獣を狩ることから始める。

我も血が欲しいのだ。一石二鳥であろう？」

ウォルトは、白い剣の言葉に頷いて立ち上がる。

このまま山に登るのは明らかに無理なので、山の周辺を回りながら徐々に高度を上げていくことに決めた。

知らない言葉の意味を教えてもらいながら歩き出したウォルトは、村の方角を振り向くことはしなかった。

8話 剣と狩獵

ウォルトの修練は、獣を見つけることから始まった。やっと見つけた山兎は、ウォルトの姿を確認すると一目散に逃げていった。その後を追おうとしたウォルトは自分の体の異変に気が付いた。

明らかに体が軽い。軽く走っただけなのに自分でも驚く程のスピードが出たのだ。

そして、そのことに氣をとられたウォルトは山兎を見失ってしまった。

「主よ。もっと目を養え。目、見る力は重要だ。戦うにも、生きるにも目がなくては始まらぬ。あの太い幹の後ろだ」

白い剣がそう教えてくれたので、できるだけ足音を立てないようにしてその木に近寄る。

幹の後ろにさつと回りこむと山兎がそこにいた。逃げようとする山兎の耳を掴むことに成功したウォルトであったが、その喜びは長くは続かなかった。掴んだ部分が潰れて山兎が悲鳴の様な声を上げたからだ。

キューキュー、と泣き声をあげる山兎に、無言で白い剣を差し込んだ。何かに引つかかることなく突き刺さった白い剣は淡い桃色を帯びた。

「ふむ。量が少ないな。まあ、今日はこれぐらいでいいだろう。ところで主よ、解体の方法は分かるのか？肉を食らいたそうな目をしてるので気になってな。もし知らぬなら教えてやろう。我を解体の道具に使うことも許可しよう」

「教えてくれ」

素直にウォルトが言うと、淡い桃色の剣が丁寧に教えてくれた。叔父にもらった剣ではこのようなことは出来なかったであろうが、この淡い桃色の剣は、長さは叔父にもらった剣とかわらないが、幅は半分ぐらいであり、その薄さは比べるまでもないほど違っていた。この淡い桃色の剣はひたすらに薄かった。そして、鋭かった。

山兎をなんとか解体したウォルトは重要なことに気が付いた。

「火はどうするんだ？」

「火を焚くのは勧めないな。理由は後で説明するが。肉を食らいたいならそのまま食べればよろう」

淡い桃色の剣の言うことに納得がいけないウォルトであったが、その言葉を受け入れ、その日初めて生肉の味を知った。獣の臭いが強くて度々吐きそうになったが、物を口に入れて咀嚼することが久々のように感じられて、山兎一匹分を丸ごと平らげてしまった。

そしてその夜、淡い桃色の剣が火を焚くのを進めなかった理由がようやく分かった。木々の隙間から闇に輝く二つで一对の光が幾つも見える。どういふことかとウォルトが聞いたすと、淡い桃色の剣は澄ましたような口調で答えた。

「主はもう獣程度では死なんだろうから、こちらから呼び出したま

でのことだ。我に血を吸わせれば血の臭いが漂い、獣共を惹く事ができるという訳だ。さあ、来るぞ」

淡い桃色の剣の言葉を引き金に、獣達はウォルトに飛び掛った。

この淡い桃色の剣はとても軽かった。それに加え異形の血が流れているウォルトの剣を振る速度は凄まじく、線の攻撃が途切れることはなかった。が、しかし、それは敵が正面からのみ襲ってくる場合に限って効力を発揮するのである。

前後左右を獣に囲まれている上に、獣との距離感がうまく掴めないウォルトがその攻撃を当てるのは困難だった。ふと、左足に何か鋭い物が食い込んだような痛みが走る。一匹の獣がその足に噛み付いていたのだが、この暗闇でそのことを見極めるのは難しかった。

ウォルトが左足の方に乱暴に剣を振ると足に食い込んだ何かが離れていくのを感じた。獣の口が離れた瞬間にウォルトの左足に走っていた痛みが消えた。ウォルトが一匹の獣を屠ったが、獣達は引く気配を見せない。それどころかその攻撃はさらに激しいものになった。

夜が明ける頃には、破けた服を纏う無傷の青年と獣達の死骸がそこらじゅうにあり、淡い桃色だった剣の色が少し濃くなり、赤に近付いていた。

獣が全て動かなくなっていることを確認して、ウォルトはその場に座り込んだ。

「我が計らいはどうだった、主よ。目を鍛えるのには丁度良いと思うてな。少々手荒であるが、問題なかったであろう？この調子なら五日程すれば下位の異形とも戦えると思うぞ。ところで主よ、疲れておるなら休むべきだが、どうなのだ？」

「少し、疲れたから休みたい」

ウォルトが正直に言うと、剣はそれを了承した。身体が疲れていなくとも、ウォルトの精神は長く続いた緊張に疲れきっていた。精神は疲れていたが、眠気はしなかった。それで剣に質問をぶつける事にした。

「ところで、カイの異形のカイとは何だ？」

「下位というのは、簡単に言えば弱い方という意味だ。どうだ、分かりやすいだろう？ この山を越えればいくつかの町や都市があるわけだが、そこでは下位や上位と言葉で、異形の強さを分かりやすくしているのだ。上位というのは強い方という意味である」

ウォルトは、初めの方はうんうん、と頷いて聞いていたが剣が言葉を続けるとその表情は驚きに包まれた。ウォルトはたまらず剣に問いかける。

「他にも人が住んでいる場所があるのか？」

「当たり前だ。何を言っておるのだ。この島に住んでおるのは主等だけではあらぬ。島、というのは広い水溜りに浮かんでいる大地のことをいうのだが、まあ後回しだ。この島の他より広い大地、大陸というのだが、そこにもたくさんの人が生きておるのだ。それも知らなかったとはな。そうだな、これからそれらを回ってみるのもよかるう」

ウォルトは自分の中での世界がいきなり広がり呆然としていて、剣の決めた重要なことが彼の耳に入ることはなかった。

9話 剣と学習

剣の話してくれることはほぼ全てウォルトを驚かせたり、呆然とさせたりした。

これまで、村を守る剣として剣術だけに全てを捧げてきたウォルトは自分の知識が増えていくことに快感を覚え始めていた。生きる為に必要なことやこの世界のこと。剣の話を聞いている間は、自分が置かれている状況をつい忘れてしまいそうになる程であった。

獣を見つける為に歩き、凶暴な獣と戦い、休んでいる間に剣の話を聞く。五日間、ウォルトは一睡もしないままにその一連の流れを続けた。五日目の陽が昇り、周囲を囲む獣を全て倒しきったウォルトに、随分と赤色に染まった剣が話しかけた。

「そろそろ下位の異形にも勝てるころになっただろう。主は今異形の血が混じっておる為、我が見ても素晴らしい成長をしておる。今の状態のままなら下位の異形でも倒せるであろう。だがしかし、いつまで異形の力を使いながら戦うのだ？主は人に戻りたいらしいが、いつまでも異形の力に頼っているのでは人に近付くことはおるか、完全に異形に堕ちてしまっても知れぬ」

言葉の返せないウォルトに剣が追撃する。

「と、いうわけであるから異形の力を抑える修練が必要だ。主は今、異形の力は抑えることは出来るのか？現状把握は大事だ」

剣が次の方針を立てる。ウォルトはしばらく目を閉じて答える。

「駄目だ。今は何も感じられないみたいだ」

ウォルトが答えると、剣は何かを考えるように黙り込む。ウォルトは思考を巡らせて、異形の力を感じた瞬間を思い出す。

この五日間の修練で傷ついた時や最初に自分の右足が再生した時のあの違和感がそうなのだろう。という結論に至ったウォルトは、剣に出会って初めて自分から修練を考え出した。

「おい剣、今夜から火を焚いていいか？」

獣が火を怖がるということを教えてもらっていたウォルトは、自分で考えた修練を始めることにした。

ウォルトが自分の考え出した修練とは簡単に言えば、自分の体の傷が一瞬で癒えなくなるようにすることを目標にした滅茶苦茶な物だった。しかもそれは、下手すれば何回も何回も異形の力を使うことになる。

しかし、手っ取り早く異形の力を抑えることにも繋がるのだ。あの違和感が、異形の力の正体であると思ったウォルトは、それを抑えれば、異形の力を抑えることになるのではないか、と思いついた。

このことを話すと、剣は驚いた。正確に言えば驚嘆している声を上げた。

「ほう。良い修練を考えたな、主。どうやら主は、体で覚えることが大層好みであるのだろうな。否、最

初に体で覚える修練を強いたのは我であつたわ。主が段々我が色に

染まっていこうだ」

「獣の血の色をした真っ赤なお前のような肌にはなりたくないな」

「その様な意味では無いぞ。どうせ主は体で覚える、という言葉の意味も分かってないのである。修練もいいが、勉強も主を強く豊かにする。体で覚えるということは……」

ウォルトは、剣の講座を目を子犬のように目を輝かせながら聞きつつ、夜を待った。

膨大な暗闇の中で小さく光る火の横で一人の青年が自分の指を切り落とす。青年が目を瞑る。切り落とされた指は砂となって消え、青年の指が再生する。生えてきた指をまた切り落とす。また目を瞑る。

青年の足元には一滴一滴零れ落ちる血が溜まって地面を変色させている。変色した地面を照らしている火がゆらゆら揺れる。

痛みが大部分を支配している意識を、指が再生する瞬間の違和感に集中させるため、視覚を遮断し、聴覚を遮断する。

だんだんと、違和感の逃げ道が分かってくる。その感覚を忘れてしまいう前にまた違和感を無理矢理引き出して、逃げ道を封鎖する。意識の包囲網を掻い潜って逃げる違和感を追う。体に宿るその違和感が動き出すのを感じることが出来るようになったのは、ウォルトが考えた修練が始まってから三日が経過した時だった。集中していないと感じられない違和感を逃がさないようにしつつ、ウォルトの修練は次の段階に移行した。

体を傷つけた際に動き出す違和感を抑える。それだけ言えば簡単そうに聞こえるが、違和感を逃がさないだけで精一杯の今のウォルトには、簡単に出来る内容ではなかった。

痛みが邪魔しないように指を切り落とすことから、肌に切り傷を入れることに変えて、動き出す違和感を察知してその通り道を塞ぐ。勝手に癒える腕の違和感と戦っていると、だんだん腕が切られる痛み慣れてき始めている自分がいることに気付いて思考を乱したウォルトは、違和感から伸びる手綱を放してしまった。気付くと、既に夜になっていた。

剣にそれを言えば、集中して修練をするのはいいが、それが出来るのも異形の力だぞ。と返ってきて、ウォルトは寝ることにした。思い返せば、ウォルトはこの森に入ってから一睡もしていないのだ。明らかに人の為せる所業ではない。

火を焚き、その近くで横になる。目を瞑った瞬間にウォルトの意識が落ちるのを感じた剣が独り言をつぶやく。

「緊張の糸を張り詰めすぎれば切れてしまう。それを管理するのも盟約者、否、師としての役割であるな。この若者がどのような名剣になるのか、楽しみだ」

その朝、久々に睡眠をとったウォルトは自分の体がとても軽いことに気が付いた。

修練も大事だが、休息も同じくらい大事だ、ということを経験したウォルトは、体で覚える、という言葉の意味を復習しつつ、これが一石二鳥か、と苦笑した。

10話 剣と実力

休息の大事さに気付いたウォルトは、睡眠や休憩を挟みながら違和感を抑える修練を繰り返していた。

方法を変え、精神的にも体力的にも余裕のある状態で取り組めるようになったおかげか、ウォルトは七日程で、傷が出来たままの状態を保つことが出来るようになった。

しかし依然として、異常な動体視力や筋力が残っている。これらを完全に抑え込むことが出来なければこの修練は終わらない。以前と比べれば小さくなったが、まだ残っている異形の力は確実に存在している。

ウォルトが、この最後の仕上げをどうしようかと悩んでいると、剣が思いついたように言った。

「多少の力なら今の我でも封印を施すことが出来るぞ。代償として今蓄えておる血が全て失われてしまうがな。盟約者の力を封印するならば、主の同意さえあれば我を身体に刺さなくとも出来る。主の意志でいつでも開放できる簡単なものだ」

「そんなことが出来たのか。それなら早く言ってくれば良かったのに」

「その様にはいかなんだ。主が異形の力を制御出来る様になる前に封印をしてみれば、我がいなくなった際に主がどうなるか……。それに、上位の封印には多量の血が必要になる。今の我には出来ない」

剣が自分を心配していることを知り、気楽に剣に頼んだことを反省しながらウォルトは言った。

「力を貸してほしい」

「お安い御用だ。任せておけ」

赤い剣が輝いてその色を失っていく。ウォルトはその様子を見ながら、自分の中に存在していた小さな異形の力が感じられなくなっていたことを確かめた。剣は異形の力を封印してくれたようだ。再び色の褪せた剣が満足そうな声で言った。

「成功したぞ。これから主は自分の持つ力だけで修練を積むことになる。とは言え、これまでの通りだ。昼間は獣を探しながら。異形の力の無い主がどの様に戦うか楽しみだ」

剣を手に取り立ち上がったウォルトは、この剣のズシリ、とした重さを初めて感じた。

確かな重さのある剣を持ちながら、獣を探す。しかし、一匹も見つけられないまま夜になってしまった。どうやらこの辺りに獣達はいないらしい。ウォルトは、一日中歩き続けた所為か軽い疲労感を感じていた。肉体的な疲労感を感じたのは村を追い出されて初めてだな、と感じたウォルトはこれ以上村の事を思い出す前に眠ることにして目を閉じる。ウォルトの意識は暗闇の中に溶けていった。

次の日、目を覚ましたウォルトは自分の身体の異変に気が付いた。これまでずっと鳴りを潜めていた腹の虫が、空腹に対して猛抗議し

ていたのだ。今日こそ獣を捕らえよう、と心に決めて焚いていた火を消し、立ち上がった。

ウォルトが歩き始めてから半日ほど経ったが、獣の姿がまるでなく鳥の声すらもなかった。

どこか不気味な森の中を進むウォルトは、変わらない風景の中で一つ動くものを視界の端に捉えた。

姿はよく見えなかったが、山兔のような大きさではなくもっと大きな獣のようだ。その獣の後を足音を潜めて追う。

しばらくすると、ウォルトは先程みた獣が木の根元で横になり休んでいるのを見つけた。

それは、山兔どころか、集団で生きる山犬より大きな獣だった。

その獣の体表はどこか神々しい程の美しい金色の毛で覆われている。金色の獣の足は強靱な筋肉を持っているが、どこかしなやかさを感じさせている。その体の先からは、ふさふさの尾が生えていて、獣の体を包むように丸まっていた。

ウォルトは、殺すことを躊躇わせる雰囲気を放つその獣に落ちている木の枝を踏まないように近寄る。

その雰囲気の前にしても、ウォルトは自分を支配する食欲を満たすべく行動していた。

とうとう隣の木までたどり着くことに成功したウォルトは、すっかり白くなった剣をしっかりと握り締めてその金色の獣に向かって斬りかかった。白い剣が金色の獣に触れるか触れないか、というところで金色の獣はその場から跳んで剣を避けた。

ウォルトと距離をとった金色の獣は白い剣を一瞥すると、ウォルトに向かって襲い掛かってきた。その強靱な肢体から生み出される速度で接近する金色の獣の動きをなんとか捉えたウォルトはその前足の鋭い一撃を右に体をずらすことで直撃を避ける。左肩に走った衝撃と共に赤い液体が飛び散る。

癒える気配の無いその傷を抱えながら、金色の獣のほうに剣を向ける。

ウォルトは、仕掛ける気配を見せずにこちらを観察する金色の獣に今度は自分から接近した。剣を当てるのが難しい相手にどう立ち向かうか、そのことを考えながら動いたウォルトは、今までの戦いでは物事を考えながら動く、ということをしていなかった自分に気付いた。

しかし、今は違う。自分の中で作戦を練って、相手と戦う。金色の獣に肉薄したウォルトは、剣を振る構えを見せながら金色の獣に自分の体をぶつける。ウォルトに体当たりされた金色の獣は、その行動が予想外のものだった、とでもいうような表情をしながら身体を傾けた。

体勢を崩した金色の獣に今だ、と剣を振り下ろしたウォルトはその目を疑った。確かに獣に向かって振り下ろしたはずの剣が地面に突き刺さっている。しかし、剣のその刀身が白から淡い桃色に変わっているところを見ると、まったく当たらなかったわけではなかったようだ。

ウォルトが辺りを見回すが、既に金色の獣の姿はなく、動きの無い風景の森が広がっているだけであった。食料を逃がして悔しそうな表情を浮かべるウォルトに剣が話しかけた。

「先程の獣からの伝言だ。なかなか見込みのある少年だな。と、ただがな。しかし、我が吸血に混じって此方に意志を伝えてくるなど、あの獣は只の獣では無いだろうな。主はどうやら見逃された様だ」

ウォルトの目に食料として映っていた獣は、どうやら只者ではないらしい。

下手すれば、食料の食料になっていたことや、癒えない左肩の傷に微妙な表情を浮かべながら、久々に感じた食欲という物に恐怖した。

その次の日ウォルトが目覚めると、山兔の死体と一筋の金色の毛が火の傍に置いてあった。久々に食べた焼いた肉の美味さに感動しながら、昨日の金色の獣の姿を思い浮かべていた。

11話 剣と再戦

久々に肉を食べて腹を満足させることができたウォルトは、今夜の食糧確保を目標に行動を始めた。

昨日までの静かな森の姿はどこにもなく、鳥の鳴く声が聞こえたり山兎の姿を見かけることができた。

なんとか一匹の山兎を捕らえることに成功したウォルトは、まだ日が高いのにそこで夜を明かそうと火を焚く準備を始めた。

ふと気付くと、獣の群れがこちらを囲むようにして近付いている。どうやら山犬がウォルトの狩った山兎の血の臭いを嗅ぎつけたらしかった。

完全に囲まれてしまったウォルトは木を背にして剣を構えた。足場が悪いが、それは相手も同じことだ、とそれを無視し、だんだんと包囲の輪を小さくしている山犬達の動きに集中する。

一匹の山犬が飛び掛ってくるのを合図にウォルトと山犬の戦いが始まった。

飛び掛ってきた山犬の体に合わせるように、剣を動かす。既に空中にいた山犬は方向を変えることが出来ずにそのまま剣に突進してその命を散らす。

ウォルトが死んだ山犬から剣を引き抜くのに手間取っていると、左から衝撃が走って突き飛ばされた。

突き飛ばされながらも剣を離さなかったウォルトが顔をあげると、三匹の山犬がこちらに襲い掛かってくるのが見え、先程の衝撃で死体から抜けた剣を地面に片足をついた状態で振り回す。まっすぐ襲ってきた山犬は横一文字に切られたが、真ん中の山犬は少し溜めを作っていて、無傷のままウォルトの喉元に喰らいつこうとした。咄嗟の判断で顎を引いたウォルトは、その頬に噛み付かれてしまった。

頬の内側まで到達するかと思った牙は、その表面に傷をつけるだけで終わった。

ウォルトは、自分に噛み付いていた山犬の胸に刺さっている薄い赤色の剣を引き抜く。次の瞬間に背中から山犬の体当たりを受けて完全に地面に伏してしまった。

ウォルトは、土の匂いを嗅ぎながら、脇腹に鋭い痛みが走るのを感じた。

脇腹を噛み千切らんとする山犬に剣を差し込んで山犬と逆の方向に身体を回転させる。

脇腹の痛みを無視して、残る山犬達を睨む。自分達の仲間が次々と死んでいるのを見て竦んでいる山犬に、今度はウォルトから接近して斬りつけた。その一匹が死んだのを境に山犬達は一目散に逃げた。ウォルトは痛む身体に鞭を打ってなんとか火を焚くと、まだ日があるうちに横になった。

脇腹の傷も痛むが、昨日金色の獣に負わされた左肩の傷も痛む。激しい動きのせいで傷口が開いてしまっていた。ウォルトはそのまま、気を失うように眠り込んだ。

日が完全に落ちて辺りが闇に包まれた頃、その中で輝く一筋の光の方向に金色の獣が向かう。やれやれ、手のかかる少年だ。とても思っているのかもしれない。

ウォルトが、頬に走る温かい違和感に目を覚ますと、自分の顔を舐める金色の獣を見た気がした。

夢心地のまま少しばかりその光景を眺めたウォルトは、そのまま睡魔に打ち勝てずに眠ってしまった。

日が高く昇り、その光がウォルトの顔を照らす。

光を浴びて目覚めたウォルトは身体の異変に気付いた。起き上がる
ことが出来なかったのだ。

意識が完全に覚醒すると、昨日の戦いで傷ついた脇腹がひどく痛む。
脇腹の激痛に耐えながら寝返りを打つと、木の実のようなものが一
箇所にまとめて落ちていた。その木の実の山の一番上に金色の毛を
見つけると、ウォルトは息をふう、と吐いてまた目を瞑って意識を
落とした。

怪我を負って二日目にやっと動けるようになったウォルトはそば
に置いてあった木の実を齧った。

豊富な果汁がカラカラだった喉を癒して、空腹だった腹が生き返る
ようだと呼んでいる。

傷はまだ癒えておらず歩くたびに鈍痛がするが、耐えられない程で
はなかった。その足で随分と赤くなった剣を持ち上げる。出会った
頃の軽さはなく、ずっしりとした重さの赤い剣にウォルトは話しか
ける。

「なんか重くなってるかい？」

「血を吸えば重くなるに決まっておろう。その分、重い一撃が放て
る上に我が鋭さも増す。決して不利な状態ではないぞ。それより主
よ、あの金色の獣はこの山の精霊だと言っておった。主が寝ている
間にまた此方に接触してきたのだ。どうやら主の事を気に入ったよ
うだな。選別を送っておく。と言っておったわ」

この木の実の山がその選別なのだろうか、とウォルトが思ってい
ると、木の幹からひよこつと顔を出している獣を見つけた。隠れな
がらウォルトの様子を伺うようにしている獣は、ウォルトが獣を見
つけたと判断すると、木の幹から完全に出てきてその姿をさらけ出

した。

その獣は、青い毛なみを持っていて、山兔と比べると同じ大きさであるのだが、その胴体は細長かった。周りの匂いを嗅ぐようにひくついている桃色の鼻がちょこんと顔に乗っていて、その横から黒い毛が幾つも生えていて、その一つ一つが張り詰めた弓の弦の様にピン、と張られていた。すらりとした胴体の先からは半月状の尾が伸びている。幼い頃ウォルトが見た異形のカマのような尾だった。

その青い獣は、おもむろにウォルトに近付くとそのままウォルトの肩に乗った。突然のことに驚いたウォルトだったが、不思議と敵意は感じられなかったので振り払うこともせず、じっとしていた。青い獣がウォルトの頬にその頭を当てると、あどけない少女を思わせる声が聞こえた。

「こ、こ、こんにちは。わ、私は……その、オサキ様から、い、言われて来ました。人と契約するのは、初めてなのですが、どうかよろしく願いしますっ！」

ウォルトは脇腹の鈍痛と闘いながら、頭痛が痛くなってくるのを感じた。

12話 剣と契約

「私は、水族の水刃すいじんの精霊です。わ、私達の種族は、水鼬みずいたちといいいます。どうか、よろしくお願いします……」

精霊のことをまったく知らないウォルトは何が何だか分からなかったが、あの金色の獣、オサキのいう選別とはこのことだ、ということだけは理解できた。ウォルトの分からない部分を剣が補足してくれる。

「水族とは、水を司る精霊の一族のことだな。他にも、火や土、風、神秘などがある。我が初めて見た精霊は土族の浄化の精霊だったな。あの頃は何と皮肉の効いた事か、などと思っておったが、良い相棒になれたわ。主も、精霊と契約するのは嫌ではないのだろうか？」

独り言のように話す剣に急に話を振られたウォルトは、戸惑いながら答えた。

「嫌なわけじゃないが、何ができるのか分からない。精霊が何かも分からない。契約を交わすなら相手のことはよく知っておきたい」

「我と盟約を交わした時はどうだったのだ？」

意地の悪い声を出す剣を無視したウォルトは、水鼬に問いかけた。

「精霊と契約するとどうなるんだ？」

「け、契約した人と……一緒に生きます。契約した人を私の力で、助けます。そしたら、私も成長で

きると思っんです！」

精一杯説明する水黽にウォルトの頬は思わず緩んだ。

ウォルトの肩に乗っていた水黽がその場を離れて地面に降り立つ。何をするのかと見ていると、水黽のカマのような尾が青い光を放つ。水黽と毛並みと同じ色のその光が半円を描く。

すると、水色の三日月のような刃が放たれた。その刃は近くにあった太い木の幹に当たり、音を立ててその木の幹の中間辺りまでめり込んだ。

ウォルトは木が倒れてくるのではないかと身構えたが、木の幹に入った傷はそうとう薄かったらしく木が倒れる、ということは起きなかった。

目の前で精霊の力を見せられたウォルトは、契約する以外の選択肢はないように思えた。事を終えた水黽がウォルトの肩に乗る。もう既にその場所が定位置のようだ。

「こんなことができます！」

自信満々な声を聞いて、二つ返事で、契約しよう、と返すウォルトであった。

水黽と契約を交わし、脇腹の傷を癒す為に全力を尽くしていたウォルトは七日程で傷が塞がったのを見て、異形の力が漏れていないか心配になった。異形の力をそのまま使っていれば一瞬で癒えてゆくので、封印が完全に壊れたわけではないにしても、一部壊れてしまっているのではないかと思ったからだ。

そのことを剣に言つと、

「そのようなことは起きておらぬぞ。それは多分、あの金色の獣の力だと思つが」

と、いう返事がきた。その回復力の正体は分からなかった。

ウォルトは、しかし本当にあの金色の獣、オサキには世話になったな、としみじみ思いながら自分の身体に異常が無いかを確かめる。頬の傷もすっかり癒えているし、左肩の傷も問題なさそうだ。

やっと完治したのだと、喜びが沸きあがってくる。異形の力を使っていたときにはそんな感動はなかった。自分が人に近付いていつてる気がして一人嬉しそうな顔を浮かべた。

ウォルトは嬉しそうな表情を浮かべていたのだが、一匹の獣の気配がその表情をかき消した。

その獣の気配は、山犬どころのものではなかった。もっと強い何かの気配がしたのだ。

これまで感じたことのない強者の気配にウォルトは身震いした。当然、力を試すことができる、という武者震いの類ではない。こういう気配を感じることが出来るようになったんだな。と冷静に関心する自分が、その気配に身震いしている自分を笑っている気がした。

だんだんと近付いてくる気配に剣を構えてその正体が現れるのを待つ。近づくにつれ高まっていく緊張感と戦いながらじっと見つめる木々の隙間に、その気配の正体を見た。

木から木へ動くその獣の姿を見ることができたのは一瞬だったが、ウォルトの二倍ほどの体長であったこと、黒い毛で覆われていたことなどは確認できた。

そのまま通り過ぎていった黒い獣に安堵したウォルトは、向こうはまだこちらに気付いてなかったのか、良かった、と思った。

しかし、ウォルトの期待を裏切つて、その黒い獣は一旦通り過ぎたはずが、何を思ったかこちらに引き返してきたのだ。唸り声を上げながら接近する黒い獣に、不意打ちの一撃を与えようと剣を構える。完全に姿を現したその黒い獣に大きく剣を振り上げ、斬りかかった。不意を衝かれた黒い獣は、反応することが出来ずにその斬撃をまともに受けた。片方の腕を切り落とされたその黒い獣は立ち上がって雄たけびを上げる。ビリビリと空気が震える。

その雄たけびを上げる獣の胸元を良く見れば、黒い毛の中で一際目立つ白い毛が横一線に存在していて、周りの毛の黒さを惹き立てている。

胴体から力強く伸びている腕にも、白い毛が上腕部から手にかけて生えていた。片方の腕は半分あたりから切り落とされていてその断面からは赤黒い血が流れ出ていた。

その黒い獣の迫力は異形にも劣らないものがある。こちらを見て激昂する獣が動き出す。一発でももらえば死ぬ、という勢いの迫力に負けられないように奥歯を強く噛んで獣の動きを見極める。

黒い獣は切り落とされていない方の腕を振り上げる。鋭く光る大きな爪がその姿を見せ、ウォルトに襲い掛かった。避けるか受けるか、瞬時に判断したウォルトはその場から後ろに跳んだ。

多少の余裕を持ってその一撃を避けることが出来たウォルトは、その場で反撃に移った。

その太い足を狙い剣を振る。その足を奪うことが出来ればウォルトの勝ちが決まったようなものだが、そううまくはいかず、表面をкасすただけにとどまった。

しかし、それだけでも十分に効果があることをウォルトは知っていた。

この盟約者なら、かすただけでもその瞬間に多少の血を吸うことができ、それを蓄積すれば有利に戦闘が進められる。この赤い剣となら、どんな獣にも負ける気がしないと思った。

その強者の気配に気圧されていたウォルトの姿はもうどこにもなか

った。高揚した気分のまま黒い獣を攻め立てる。黒い獣の一撃を大きく避けてその隙を逃さずに斬り込んだ。

黒い獣から流れる血と、それを吸いさらに赤くなる剣に、ウォルトの気分は最高潮に達した。

黒い獣の振り下ろした腕と同じ瞬間に攻撃を仕掛ける。今の自分ならこの大きく強い気配を放つ獣と対等に打ち合えると思ったのだ。

しかし、それは間違いだった。高潮した気分が判断を鈍らせる。自分の持つ実力を誇張して認識させていたのだ。

地面にしたたかに打ち付けられてしまう。しかし、黒い獣も血を失いすぎたのかどこか動きが鈍い。

しかし、その一撃をともに受ければ異形の力を使わねば生きられない程の傷を負ってしまうだろう。

ウォルトは、悲鳴を上げる体を無視して立ち上がる。剣を構えて隙を窺っていると、以前に一度だけ見たことのある水の刃が黒い獣の足を襲う。立ち上がったいた黒い獣はたまらず体勢を崩した。

この隙を見逃すウォルトではなかった。大きく斜めに斬り込んで、剣を振り切った。

致命傷を受けた黒い獣は、弱い雄たけびを上げて動かなくなった。先程の力強い雄たけびと比べて、正反対のようなものだった。

「ありがとな、水鼬。おかげで助かったよ」

「い、いえいえ……。あの時のウォルトさん、ちょっと怖かったです」

肩に飛び乗ってきた水鼬に話しかけて、返ってきた言葉に自省した。確かに、あの時の自分の判断力はどこがおかしかった気がする。

「ところで今までどこにいたの？」

「く、黒い獣が……こ、怖くて……。でも、ウォルトさんの様子が、お、おかしくなって……」

肩でプルプルと震えだす水黽を優しく撫でると、徐々にその震えが収まっていく。

ウォルトは、水黽の震えが完全に収まったのを確認して撫でていた手を止めた。

ウォルトが、判断力を乱した原因を自分の中に探せば、簡単に答えが出た。実力の成長に精神の成長が追いついていないのだ。どんどん強くなる自分の実力に簡単に酔ってしまった甘い精神を鍛える必要がある、と結論付けたウォルトは、目の前で死んでいる黒い獣に黙祷を捧げた。

自分に教訓を与えた黒い獣を目の前にした青年の肩には青い獣がちょこんと座っていた。

13話 剣と方針

異形の住む山の麓では、一人の青年と一本の剣と一匹の獣が今後のことについて話し合っている最中だった。その中でも、黒い獣が教えてくれた問題は大きいものだった。

「我からは何も言えぬ。血塗れた剣が血に酔うな、などと申せば笑い種であろう。しかし、主が血に酔うことを善しとしないのであれば、助言ぐらいは致そう」

剣はそう言ったきり黙りこんでウォルトの言葉を待つようだ。剣の言葉が途切れると、次は水鼬が言葉を発した。この水鼬はまだ水刃の精霊として未熟らしく、ウォルトと契約することで精霊として成長するつもりらしい。

「私は、折角契約してくださったウォルトさんが本能が求めるまま戦う、まるで獣のような人にはなって欲しくありません……」

蚊の鳴くような声でも、きちんと自分の意見を言う水鼬に急かされた気がしたウォルトは、自分の考えをまとめていく。

異形の血が混じって人ではなくなったけれども、そこから異形の力と共存することを拒んで、やっと成し遂げたのだ。

そうして、人に近付いたと思っていたのに、今度は人として自分の身も省みずに血に酔うまま戦っていては、そのうち封印している異形の力も使いながら戦うようになってしまうだろう。

あの封印は自分の意志で簡単に破れる物だと剣も言っていた。そうしたら、今度こそ完全に異形に堕ちてしまいかもしれないのだ。そ

れは、ウォルトとしてはとても嫌な事だった。絶対に受け入れたくない。

その為には、血に酔わず、自分を見失わないように戦うことが出来るようにならなければならない。

精神と実力の釣り合いを取る為にも、精神の成長は不可欠なものだ。

やっと自分の考えをまとめることが出来たウォルトは口をひらいた。

「やっと異形の力を封印して人に近付くことができたのに、今さら異形に堕ちてしまうようなことはしたくない」

その言葉に、ウォルトの肩に乗っていた水鼬は首をかしげたが、剣の方は満足そうな声を出した。

「精神を成長させるのは、経験だ。様々な出会いや体験が精神を成長させてくれるはずだ。今も成長しているだろう。しかし、精神の成長には時間がかかる。異形の力を借りて瞬間的に伸びた実力の成長に追いつくものではない。主の精神を豊かにするためにも、我はこの島を旅することを勧めたい」

ウォルトは剣の言うことに頷きながら、流してしまっていた山の頂上にたどり着いた後どうするのか、ということをはっきりと決めたのであった。

異形の住む山の頂上を目指す、という目標を最初に掲げたウォル

ト達はとうとう山の周りを回ることを止めて、その頂上に向かって歩を進めることに決めた。

山を登るということは、必然的に異形と戦うことになる。ウォルトは、このまま異形と戦うことに不安を感じていたが、剣と水黽がいれば大丈夫だ、とも思っていた。村から追放されたウォルトが頼れるのは、この剣と水黽だけであつた。そのなかで、未熟な精神を補ってくれる剣や精霊である水黽のことを心底信頼していた。彼らなら自分のことを見捨てない、と無意識のうちに安心していたのだ。

具体的な山の方向を水黽が木に登って確認してくれている。その報告を待ちつつ、剣と話す。

「今の主なら、下位の異形なら何とか勝てるだろう。しかし、自分の精神を律しながらとなると話は別だ。結果の分からぬ戦いになるはずだ。もし負傷したら麓に引き返すのが良策である。身体に異常がなくなるとも、精神的疲労を感じたならば戦わぬことだな」

「分かった。その通りにする」

「主の実力は確かに成長した。敗北を考えて心配などはしなくとも良い。余計なことに集中力を使わず、異形との戦いだけに意識を向けるのが良かるう」

剣と語り合うウォルトの肩に、木から降りてきた水黽が飛び移る。飛び乗ってきた水黽が少し震えているのを感じて、ウォルトはその震える身体を撫でてあげる。ウォルトに撫でられながら、水黽は自分が見たことを報告する。

「や、山はあっちの方です。でも、異形の気配がします……」

そのカマの様な尾の先端が、山の方角を指しているのだろう。ウォルトは山の方角に目を向ける。
その目には、これから待ち受けるであろう困難が映っていた。

14話 剣と信頼

山の頂上に向かって歩き出したウォルト達は、最初の壁に出会っていた。

どうやら、水黽は異形の気配を感じることが出来るらしく、それがだんだんと近付いてきていることを教えてくれた。やがて、ウォルトが過去に二回ほど聞いたことのあるあの声が聞こえてきた。

深呼吸を一つしたウォルトは、深くなる森の中を異形に向かって歩いていった。

異形の声がだんだんと大きくなるにつれて、ウォルトの緊張も高まっていく。最初の不意打ちでどれだけ攻撃を与えられるかで、異形との戦いの成果が大きく変わるだろう。

木から木へと、身を隠すように近付いていたウォルトはその大きな物音が聞こえた。木の陰から音の鳴る方向へ顔だけ出して様子を見ると、その音は木を薙ぎ倒しながら近付いてくる異形の出したものであった。

しかも、まっすぐこちらへ向かって近付いてきている。風の流れを読んで移動していたウォルトは驚くと尾同時に納得していた。

獣相手ならば、風を読み、臭いが流れないように近付けば簡単に不意打ちをすることが出来た。しかし、獣と異形は根本的に違うのだ。それをどこかで忘れていたようだ、と思いながら、ウォルトは近付いてくる異形の姿を視界に捉える。

その異形は、端的に言えば、山犬とその胴体から人の上半身が生えているようなものであった。

しかし、下半身の山犬のような部分は、あの黒い毛はなく、ごつごつとした硬そうな紫色の皮膚で覆われている。その紫の皮膚に触れていた木々が瞬時に枯れていく。

数々の木を薙ぎ倒したであろうその下半身の頭には、蛇の鱗が黒い毛の代わりのようにびっしりと貼り付いていて、顔の表情は分からない。しかし、顔の真ん中で一つだけ光っているその青い目は、欲望の赴くままに喰らい尽くしたい、という狂った意志が感じられる。下半身の四肢は、胴体と同じように紫色の皮膚で覆われている部分と、足元の緑色の部分とに分かれている。緑色の足が触れた地面は、薄い緑色の輝きを放っている。

下半身の胴体部分から生えている上半身は、人そのものの、様な姿であったが、その体には鋭い棘のある蔓が何本も絡んでいて棘と上半身がぶつかる所から、血が流れている。赤い血の線は、その下半身の方へ流れていき、紫色の皮膚にぶつかる場所で蒸発しているようだった。

異形は、ウォルトの間合いギリギリのところまで立ち止まると、下半身が自分を誇示するように頭を上げて、身体を上に戻らせる。突然、その頭を振り下ろした勢いと共に、異形がウォルトに向かって突進していた。

真っ直ぐ突進してくるその異形をウォルトは右に動くことで難なく避ける。いや、避けたと思った。しかし、異形がウォルトの横を通り抜ける瞬間に、上半身に絡まっていた蔓の一本がこちらに向かって伸びてきて、ウォルトの左腕を絡め取った。

棘の食い込むその感覚に顔をしかめながら、剣で蔓を切り払う。ウォルトは、普段両手で剣を扱っている為、蔓を払うのに若干手間取ってしまう。

やっと蔓から開放されたウォルトが異形の方に目を向けると、水の刃が異形に襲い掛かっているのが見えた。異形の紫色の胴体に当たったのだが、あまり効果がないらしく少しの切り傷を付けただけで水の刃は消え去った。

しかし、ウォルトが体勢を取り戻すには十分な時間稼ぎである。下半身の突進を警戒しながらウォルトが接近すると、上半身から何

本もの蔓がこちらに向かって伸びてくる。それを一本一本処理しながら、じりじりと距離をつめる。蔓にある棘には、異形のものと思われる血が付いていて、蔓を一本切る度に血の滴が飛び跳ねる。

横から水の刃の援護がきて、蔓を一本切り落とした瞬間に、ウォルトは水黽に感謝しながら大きく前進した。それに気付いた異形は、蔓で自分の体を包んだ。幾重もの蔓が折り重なってできたそれはまるで棘に守られた繭のようだった。

その繭の前に、この剣ならいける、と思ったウォルトは動かない的を狙って大きく剣を振り上げた。しかし、その瞬間にウォルトの足に蔓が絡みついた。

体勢を崩してしまったウォルトが、足に絡みつく蔓を払おうとするが、次から次に絡みつこうとする蔓を処理するのが精一杯でなかなか足に絡みついた蔓を切ることができない。

「水黽！」

ウォルトがそう叫んだとほぼ同時に、水の刃によって足に絡み付いていた蔓が切られた。瞬時に立ち上がって、剣を構えなおす。接近して斬りかかれれば、先程のように蔓に反撃をもらってしまうだろう、と理解したウォルトは必死にこの状況を打破する作戦を考える。水黽が水の刃を幾度も放ち、血の滴る蔓の繭がその刃を受ける。

しかし、水の刃は表面の一本を切り裂くにとどまってしまう。遠距離から攻撃する手段を持たないウォルトは、歯がゆい思いを抱え始めた。

水の刃を放っていた水黽は、息を荒げているのか、その体を上下させている。

ウォルト達の攻撃の手が緩んだ瞬間に、三本もの蔓が同時に水黽の方に伸びていく。水黽は、その蔓を翻弄するように木々の根から枝へ、そして地面へと縦横無尽に駆ける。

そうだ、水黽だ。

水黽と、あの赤い血の滴る蔓の蔦が、ウォルトにこの状況を打破する方法を思いつかせた。

15話 剣と頂上と欠けたままの月

水黼と血の滴る蔓の繭がウォルトに生み出させた発想、それはこの場にいる全てのものが存在しなかったら、到底出来ないものだっただろう。

水黼の放つ水の刃と、滴る血は、ウォルトにこう教えてくれた。

——水の刃を血で生み出せ。

と。

あの異形に飛んでいき、それを切り裂く鋭い刃を思い浮かべる。

それは、あの蔓から滴っているような真つ赤な血だ。水黼が目の前で何度も放ってくれているから、簡単に思い浮かべることが出来る。ウォルトは、その手に持っている血を吸って真紅になった剣に心で問いかける。

——血を刃にして放つことはできるか？

いつもより女性に近いトーンで真紅の剣が返してくれる。

——可能だ。

その声は、心に直接話しかけてきているような不思議な感じがした。剣のお墨付きを聞いて、心の片隅にあった一片の迷いが消え、血の刃のイメージが固まっていく。この血の刃は鋭い、速い、避けられない。

——いつでも行けるぞ。

剣の声を聞いて、その剣の柄をしっかり握り締める。そして、大きく振りかぶったウォルトは

「はああああああ！！」

と、咆哮しながらその剣を振り切った。

真紅の剣は、その瞬間に色を失う。その代わりに、異形の息の根を止める為には十分すぎる程の威力を纏った血の刃が繰り出された。血の刃は真っ直ぐ異形に向かって走る。

繭のように自分の体を包んでいた異形は、瞬時に避けることはかなわず、その何本もの蔓ごと真っ二つになった。異形の断末魔が山に跳ね返って二重に聞こえる。異形の断面からはおびただしい血が流れ、その地面を赤く濡らしていた。

左腕と左足を、あの異形の蔓にあった棘で傷つけられたウォルトは、無理をせずその傷が癒えるまで麓で待ち、再び山に向かって歩き出した。傷が半分ほど塞がった頃に一度、山犬に襲われたのだが、水黽の活躍によってそれを退けていた。

山の方に歩くにつれて、森が深くなっていく。背の高い草を払いながら進んでいくと、一気に視界が開けた。ウォルトの目の前には、岩肌がそのまま見えていて、傾きがいきなり急になっている。

これを登り切れば頂上だ、と思いながら最初の足場になりそうな場所を探していく。

「そっついや、今回は異形はでなかったな」

ウォルトがつぶやくように言うと剣がしっかり返事をくれる。

「出現しないのであれば、それが良いだろう。我は別にこの山に住むすべての異形を倒せとは言っていないからな。山に登る際に下位の異形でも倒すことができれば、この島を回る為に必要な実力を持つことになるから山登りを勧めただけだ。主は体で覚えることが得意なようだからな」

ウォルトは、前にもこんなことがあった気がする、と苦笑いしながら一步一步確実に登っていく。

思えば、剣と出会って色々なことがあった。最初は、自分の命を救ってくれた存在を無碍に扱うことが出来ず、頼れる者もいなかった。それで生きる為に仕方なく剣と過ごしていた。そのうち、色々なことを教えてくれる剣の話の一字一句漏らさないように聞くようになり、その鋭さと力に助けられたりもした。

異形の力を抑える時にも剣は活躍してくれた。例え盟約者でなくなるうとも、共にいたいと思える。ウォルトは、剣は盟約者であり、師であり、友だと感じていた。

水黽はまだ契約を交わして日が浅いが、信用できる精霊だと思っている。ウォルトが初めて異形を倒すことができたのは、水黽のおかげだと言っても過言ではない。ウォルトに絡みついた蔓を切ってくれたり

、傷付いたウォルトを山犬から守ったりしてくれるあの水黽は、その体に似合わないくらい頼りになる。

そういえば、ノアと契約している精霊は見たことないな、と気付いた。様々な生き物がいるように、精霊にも様々な種類があるのだろうか。

村を追い出されてから、グレイツやノアのことを考えないようにしていたが、山の頂上が近づくにつれて、そのことが頭を支配する。村を守る剣として帰ることが出来るようになるのはいつになるのだろうか。

とうとう、この山の頂上が見えてくる。頂上は小さな広場のようになっでいて、まっすぐ立つことが出来そうだ。ウォルトは、水鼬を肩に乗せたままその最後の一步を踏み出した。

頂上から見た景色は、それまで村のことを考えていたウォルトの頭を空っぽにする程、壮大なものだった。頂上から見下ろした世界を征服したような気分になる。近くに開けた場所が見える。あれはきっと自分の生まれた村だな、と思いながらそのまま見回すと、青い部分が広がっている。

「あの青い場所はなんだ？」

「あれは海という。川の流れ着く先にある。大きな水溜りだな。そして、この島はその水溜りに浮かぶ大きな石のようなものだ。勿論、海の向こうにも陸地があるぞ」

剣を逆手に持ちながら問いかけたウォルトに剣が言う。

「そうなのか。いつか行ってみたいな」

今日は、雲ひとつないほどの晴天である。島の先端からその反対までしっかり見渡すことができる。

ウォルトが見下ろした青い海に囲まれたこの島は、欠けた月のような形をしていた。

15話 剣と頂上と欠けたままの月（後書き）

短いですが、これで一章完結です。
もちろん、まだまだ続きます。

16話 剣と蛇

山の頂上で周りを見渡していくと、ウォルトの村と別の方向に集落のようなものが見える。その集落は大きく、遠かった。しかし、剣は何事もないように言う。その向こうにも同じようないくつかの集落が見える。

「主の村と別の方向に集落が見えるはずだ。その中で一番近いのが、主が最初に目指す町『シーニア』。この町は、港町、海の恩恵を受けて生きる民の集まりだ。主も魚は知っておるだろう。海には、川よりも大きな魚が多い。その魚を獲って、他の集落と交流を持っておるのだ。まあ、我が最後に訪れたのはもう随分前であるから、今はどうなっているかわからんがな」

剣が、さらりと言ってのけるが、ウォルトの村よりも遠いところに行かなければいかないと聞いたウォルトは、少しの落胆と大きな期待の混じった表情をして聞いている。

「い、今もあんまり変わってないですよ」

水鼬が補足している。

なぜ今の町のことを知っているのかは分からないが、精霊とはそういうものなんだろう、とウォルトは結論を下して、目指すべき目標を見据える。その集落は海に近く、ここから村と反対方向に歩いて海に出れば、そこから簡単に辿り着けそうだと思った。

しかし、それは甘い認識だということを思い知ることになるウォルトであった。

ウォルトが、下山を始めて少し経った頃、日が落ち始めてきた。登ってきた場所を辿るように降りていたのだが、夜にこの岩の部分を降りるのは危険な為、ここで寝ることにした。足場も悪く、何の道具も持たないウォルトは剣を岩に突き立て、それを支えにうつらうつらとし始めた。

真つ暗な夜にきらきらと瞬く星が散りばめられた頃、ウォルトはかすかな振動に目を覚ました。その振動の源はだんだんと近付いてきている。ウォルトは完全に目を覚ますように顔を振る。

そのままその振動を感じていると、目がだんだんと暗闇に慣れてくる。森のほうへ目を凝らす、何もおかしいところはなかった。ただ、振動だけが近付いてくる。

「異形が近付いてきてますっ！」

どこからか現れて、ウォルトの肩に乗った水黽が彼に告げる。

しかしウォルトに、異形の姿を捉えることは出来なかった。不吉な地鳴りが聞こえてきて、ウォルトは身構える。その地鳴りが森と岩場の境に達したとき、それはウォルトの視界に入った。

その異形は、境目の地面から這い出てくるように現れたのだ。頭だけ出しているその異形は、ウォルトのほうに向かってうねうねと動く。その姿は蛇のようであったが、鱗はなく、蛇のように動く毛が大量についていた。

その目は暗闇の中で赤く光っていて、見たものを凍りつかせるよ

うな眼力を持っていた。獣の類ではないぞ、と、その眼力で伝えてくる。目の下にある大きな空洞は、口のようなものだろうか。しかし、それは閉じることなく、すべてを飲み込んできた巨大な口だった。

ウォルトは、その異形が完全に地面から出てくる前に片を付けようとその異形に向かって跳躍する。

さすがに一歩で異形の元まで跳ぶのは危険が大きすぎるらしく、大きな歩幅で、なるだけ大きな岩を選んで進んでいく。これを踏み外せば死が待っている。

その間にも異形はだんだんとその姿を地面から露出させていく。既にそばに生えている木より長い。

しかしまだまだ長いらしく、どんどんその胴体が地面から出てくる。

とうとう異形の間近まで降りることができたウォルトは、その場から大きく跳躍すると、その初撃で仕留めるべく中途半端に出ていた異形の細長い胴体に斬りかかった。

ズシャ、と嫌な音を立てながら呆気なく真つ二つになる。斬られて地面に叩きつけられた異形の頭の方は、しばらく動いていたが、そのまま動かなくなつて砂のように消える。

しかし、地面から出ている根元の部分はまだまだ元気そうに蠢いていて、地面から這い出ようとしている。

ウォルトはその光景に思わず顔をしかめてしまう。その断面から血を吹きながら、なおも地面から這い出ようとする異形は、その力を失うことはない。そのままその様子を見ていたウォルトは、異形の二本目の頭が出てきたところで我に返った。

ウォルトが二本目の頭を斬り捨てると、それを皮切りに次から次へと異形の頭が地面から這い出てきた。

それを片っ端から処理していくが、どうにも異形の頭の這い出てくる数の方がウォルトと水黽の処理できる数より多く、だんだんと地面から出ている異形の頭が増えていく。

ウォルトが一番最初に斬った頭は、すでに遠く上のほうにあった。ウォルトが斬り落とした数々の頭の残骸が、地面に落下し砂に帰る断面からは血が噴き出して、血の雨をウォルトの頭上に降らせていた。

ウォルトがその異常に気付いたのは、踏みしめている地面がだんだんと盛り上がっているのを感じた時だった。それまで、そこまで大きくなかった異形の気配が大きくなっている。

後ろの岩場まで跳んで様子を見れば、その異形は、自分の本当の姿を晒し始めた。一つの大きな顔が地表から覗く。それは人の顔に酷似している。目の部分の空洞に、大きな木が飲み込まれていく。ウォルトが今まで何本も斬ってきた蛇のような頭を持つ異形は、その大きな気配を持つ異形に生える髪の部分だったのだ。何本もある髪のが全て同じように赤い光を放っている。闇の中で走る赤い光に目を奪われそうになるのを抑えて、異形の姿を見据える。

その異形は、頭の部分が完全に露出していた。真つ暗な空に浮かぶ星が異形の顔を照らしている。

その頭はあまりにも大きく、ウォルトはその異形の全体像を想像して恐怖した。頭であの大きさなのだから、体全体では今まで登っていた山程もあるだろう、と予想する。しかし、どうやらその異形は頭だけ出して満足したらしく、それ以上地面から出てくる様子はない。

ズリズリと音をたて、地面を削りながらこちらに向き直る異形の顔に、嫌な予感がウォルトを駆け巡る。そして、その嫌な予感は見事に的中した。

異形の大きな口から、なんともいえない濁った色の液体が吐き出された。吐き出されるより先にその場から離れる予備動作をしていたウォルトは、難なくそれを躲すことに成功する。

ウォルトが、数秒前にいた場所では、音を立てて溶けている岩が確認できた。溶けている部分は、濁った緑色に光っている。それに釣られていると、異形の髪が襲い掛かってくる。

ウォルトのほうに向かっていく異形の髪を、水の刃が横から切り裂いていく。一気に三本も斬り落とした水の刃が闇に消える。自分も負けてはいられないと、近付いてきた髪を全て斬り落としていく。髪と同時に飛んでくる岩も溶かす液体に当たらないように大きく跳躍する。その際にも一本の髪を斬る。だが、まだまだ異形の髪は残っており、ウォルトは既に多少の疲労を感じ始めていた。

このままでは、異形の髪を全部倒す前にウォルト達の方が力尽きてしまうだろう。

現に水黽の方は既に、水の刃を撃つ間隔が長くなってしまっている。

水黽が縊る様な目付きでウォルトを見ると、彼は自分の剣を異形に向かって放り投げているところだった。

17話 剣と海

ウォルトが放り投げた剣は、見事に異形の顔の真ん中に突き刺さっていた。

剣がすつと赤みを帯びる。異形の動きがだんだんと鈍くなり、遂にその動きを止める。さらさら、と砂のようになって異形が崩れると、そこに赤い剣が、カラン、と音を立てて落ちた。

ウォルトの考え付いた作戦は、ほとんど運任せの起死回生を狙うものだった。相手が大きく、動きが鈍くなければこれが実行されることは無かつただろう。しかし、投げられた剣が、異形の髪によって弾かれればそこで終わり。上手く刺さるかどうかわからない。そんな状況でその作戦を実行するだけの度胸と運が、今回の彼の勝利を引き寄せたようだ。さらに、髪を何本も斬られてその断面からの出血で血を多量に失っていたのも吉と出たようだ。

蛇の異形を倒したウォルトは日が昇るのを待つついでに、今から向かう町、シーニアのことについて質問していた。

「町にはどんな人がいるんだ？」

「そうだな。町を治める者、漁をする者、農耕する者、町を守護する者などが多い。我がいた際には、職人と呼ばれるモノ作りの達人に世話になったな。彼らの技術は素晴らしかった。特に造船技術においては、大陸のそれに引けをとらないであろうな」

「今もそれはあんまり変わってないですー」

ウォルトは、水黽が難なく剣の話に付いていつているのを見て、しばし頭を抱えた。

水黽が何でもないのでのようにウォルトに追撃する。

「あ、でも確か今は、メアル教の人の少なくなかったと思いますー」

「ほう？我もそれは初耳だな。何なのだ其れは」

自分の知らないことを水黽が知っていて、若干拗ねている様にも聞こえる剣の声が聞こえる。

どうやら夜が明けたらしいので、ウォルトは水黽と剣の話を聞き流しながら海に向かって歩き始めた。

しかし、どうやら水黽と剣はウォルトを通じて話しているらしく、嫌でも耳に入ってきてしまうのである。

「新興宗教ですよー。この世の理全てに通ずる一人の少女を人より高位の存在ととらえて崇め讃えるらしいです。私としては、人は人だと思っんですけどね」

「なるほどな。我には心当たりがあるな。宗教を興すまでに有名になっってしまったのか」

「どんな人だったんですかー？」

「そうだな。一言でいうなら……」

変わらない景色の森の中を黙々と歩き続けるウォルトは、もう会話に入る気すら起きなかった。

夜まで歩き続けたが海に出ることが出来ず、森の中で睡眠をとる。火の準備ももう慣れたものだ。手早く済ませて地面に横になる。果物を齧りながら空を見ると、木々の隙間から輝く星々が見える。果物を食べ終えたウォルトは、そのまま眠りについた。

朝、目を覚ましてまた海の方へ歩き出してしばらく経つと、ウォルトの耳には聞きなれない水の音が聞こえ始めていた。

水黽に何の音かと聞けば、

「こ、これは波の音です」

と、返ってきた。剣と話しているときには囁んだりしないのに自分と話しているときだけ囁むことに首をかしげながら歩く。とうとう森を抜けたウォルトの目の前には思わず感嘆の声を上げてしまう絶景が広がっていた。

白銀に輝く砂の向こうに青く光る海があった。海はどこまでも続いていて、青い空と混ざって、その境目が分からない。白銀の砂を濡らす波が生まれては消える。それも幾度も繰り返す。

一際大きな波が既に濡れている部分を乗り越え、まだ濡れていない砂を濡らすことに成功する。そして、波は海に戻っていく。自分も、人に、村を守る剣に戻るだろうか。

ウォルトがそのような想いを廻らせていると、海からパシャ、と音を立てて魚が跳ねる。その音で我を取り戻したウォルトは、シーニアの方に向かって歩き始めた。

波の音を聞きながら歩く。剣に海の水は飲めないことを教えてもらったウォルトは、腹を満たす為に森に戻る必要があるのだが、この素晴らしい風景が彼の後ろ髪を引く。

それでも、食欲の前には勝てなかった。森に入ったウォルトは、食べる事ができる果物を探す。距離を稼ぎながら獣を狩るのは大変なので、最近は専ら果物が活躍している。水黽が見つ付けてくれたり、おいしい果物の特徴を教えてもらったりしていたので、食べ物に困ることはほとんどなかった。

赤く小さな粒々の塊を豪快に齧る。その果物はとても甘く、水もたっぷりと含んでいた。これを見つけてきたのはもちろん水黽だ。しかし、当の本人は果物を食べる仕草を見せない。よく思い返せば、水黽が何かを食べていることを見かけたことが一度も無いことに気付いたウォルトが水黽に問いかける。

「水黽は何を食べるんだ？」

「わ、私は、そ、その……。ウォルトさんの『魔』をいただいてます……」

ウォルトはその一言に驚く。それではまるで異形のようなのではないかと。

そして思う。『魔』とは一体なんなのか。

「その『魔』ってのは何だ？」

「『魔』とは、す、全ての存在に宿るものです。木も、川も、獣にもあります。『魔』は、いつでもどこでも使われて、生み出されます……。世界を循環する生の流れ、精霊の間ではそういう風に伝えられています」

「なんとなく分かったような、分からなかったような……」

どうやらウォルトは、体で覚えることのできないものは苦手らしい。
った。

18話 剣と魔法

「魔を感じることが出来る人もいますよ。魔を自分の思うままに操り、し、自然現象を引き起こしたり……。そういうことをこの世では魔法と呼んでいます。メアル教徒の崇める少女も、素晴らしい魔法使いだったようです……」

引き続き水黽がウォルトに説明している。しかし、ウォルトは魔法の才能に恵まれていないらしく、魔を感じることすら出来ない。魔を感じることが出来たなら、体で覚えることが得意なウォルトの得意分野になるのだが、もしもの話には意味がない。

ウォルトは、いまいち理解できない魔法の話を聞きながら海伝いに町の方へ歩いていく。

そして、町までもう少しだというところで、山犬の気配を感じた。もう何度も森の中で感じたこの気配に誘われるように、山犬の方へ向かう。手に持っている赤い剣をしっかりと握りなおして、足音を消す様に歩く。

山犬の気配を辿りながら向かった先にあったものは、対峙している、今にも飛び掛りそうな山犬の群れと、武器を持った複数の人だった。先行する一匹の山犬が、先頭に立っている体格の良い男に向かって接近する。

山犬の飛び掛りを難なく避けた男は、山犬が着地したところを狙って刃の部分が大木の幹ほどもある大きな斧を振り下ろした。その一撃は、斬るよりも、叩き潰すことを狙ったものようだった。振り下ろされた斧は、小気味の良い破裂音を出しながら山犬の頭を正確に砕く。そのまま、一匹目の山犬に続いて飛び出していた後続の山犬を打ちのめしていく。

男の戦闘力は素晴らしかったが、どうやらその男だけが異常に突

出しているだけのようで、周りにいる男達は山犬相手に押されているらしかった。一気に三匹から襲い掛かれた一人の若い男の首に、一匹の山犬が食らいつく。そのまま押し倒された若い男を山犬達が襲う。斧の男の援護を受けて山犬から開放された若い男は首から血を流していて、起き上がってはこない。

射手の放った矢が飛ぶ中、山犬の群れに正面から突撃する斧の男は、怯むことなく山犬達と戦っている。ウォルトがその男の戦いぶりを見ていると、突然、山犬の群れの方で火柱があがった。

その火柱は、山犬一匹を丸焼きにして消える。何が起こったかわからなかったウォルトは、思わず

「なんだあれは!？」

と、声を上げてしまっていた。

しまった、と思うがもう遅い。その声に反応した二匹の山犬がウォルトの方に向かって接近を始める。

ウォルトの間合いに入った山犬を一息で斬り捨てる。続くもう一匹の攻撃に合わせて、ウォルトも剣を突くようにして前に出す。頭から剣に突撃した山犬は、そのまま赤い剣の刀身をその体に収める。

次の瞬間、ウォルトの右腕に何かがめり込んでくるような痛みを感じた。見れば、矢が右腕を貫通するように刺さっていて、赤い血が流れ出始めている。続いて、右足にも同じような衝撃を感じた。

こちらは、かすっただけのようで、自分の足元の近くに矢が刺さる音が聞こえた。

ウォルトは傷を負った右足を庇う様にして、その場から離れようとする。まさか人から攻撃されるとは思っていなかった。しかし、町の人からしてみればウォルトの格好はあまりにもひどいものだったのだ。

長い森の生活の中で、山犬に噛まれてところどころが破れて、土の色が大量についている原型の分らない服。自分勝手に伸びて、整えられていない髪。しかも、彼が手に持つ赤い剣は強い血の臭いを放っているのだ。

シーニアの人からすれば、ウォルトの放つ気配は異形のそれによく似ていたらしい。

傷を負ったウォルトは、木で自分の身を隠しながら距離を稼ぐ。しかし、山犬達を殲滅したシーニアの人々は、異形の逃走を許すような心を持っていないらしく、ウォルトを追跡し始めた。それに気付いたウォルトは速度を上げようとするが、右足の傷がそれを許さない。

次第に、斧の男の気配が近付いてくる。それに気をとられたウォルトは、目の前で起きたありえない現象に対処することが出来なかった。

木の枝がその身を不自然に曲げ伸ばしてウォルトの腹を貫いていた。激痛がウォルトを襲い、その精神を削り取る。木の枝は、ウォルトが痛みに転げまわることすらも許さない。ウォルトの体内の木の枝が、敵を貫く為に新しい芽を生み、その芽を急成長させようとする。

自分を貫いた木の枝が、新たな行動を起そうとしている事を感じたウォルトは、慣れない左手のみで木の枝を切り払った。支えを失ったウォルトはその場に倒れこむ。しかし、いつまでも倒れている暇は無い。後ろから感じる斧の男の気配がどんどん近付いてきているのだ。生きたい、という本能が、ウォルトの枷を外そうとしていた。

斧の男は、山犬の群れの最後の生き残りに向かって、無慈悲にその斧を振り下ろす。その斧は大きさと振られる速度が、まるで一致していない。明らかに動く速度の方が早いのだ。風を切る音が響いて、山犬は血飛沫を上げ、動かなくなつた。

しかし、斧の男は止まらない。何故なら、彼の目にはまだ敵の姿が残っているからだ。その格好は、盗賊等から命からがら逃げてきた旅人に見えなくも無い。しかし、彼が持っているのは強い血の臭いを放つ赤い剣。あれは、普通の旅人が持っているような武器ではない。よって、彼は敵を排除する。シーニアという町を守護する民として。

「俺はあの化け物を追う！ いずれ町に危害を加えぬとも限らないかな。治癒の力を持つ者は怪我人の治療に当たれ！」

斧の男が声を張り上げると、守護の民が怪我人を救護する集まりと、斧の男の後を追う集まりに分かれる。

しかしその中で、微動だにしない一人の少女がいた。

その少女は、目を閉じて両手を胸に当てているだけでまるで動くとはしていない。風が彼女の艶やかな黒髪を揺らせている。そこはかとなく漂う儚さが、直立不動の彼女とその近くで怪我人の救護に忙しく動いている人との間に、薄い境界線を作り出して、彼女の周りだけが平穩に包まれているように見える。

しかし、彼女の内面はそうではない。彼女は自分の命を担保に世界の事象に干渉しているのだから。

19話 剣と才能

火には、『火に宿る魔』が存在し、水には、『水に宿る魔』が存在する。

例えば、木が燃えたとする。すると、燃えるという現象が呼んだ『火に宿る魔』が、『木に宿る魔』を急激に世界に還していく。やがて、火が消えれば『火に宿る魔』も世界に還っていく。そしてまた新たな木が生まれれば、そこに『木に宿る魔』が宿るのだ。

そうして循環していく世界の流れ。では、火のない場所に『火に宿る魔』が呼ばれたらどうなるか。答えは簡単。この世界では、『火に宿る魔』が『火』を呼ぶ、という現象が起きるのだ。そうして『火』が消えれば、『火に宿る魔』も世界に還る。何も無い地面に『木』一本分の『木に宿る魔』を呼んだなら、それに答えるように木が生えてくるのである。

では、何故『火』の無い場所に『火に宿る魔』が呼ばれるのか。その答えは、黒髪の少女にある。

この世に生きる者のほとんどは、魔を変化させることはおろか、感じることも出来ない。しかし、時として生まれてくるのだ。そういう才能を持った者が。黒髪の少女は、自分の中に宿る魔を、他のものに宿るはずの魔に変化させることが出来る。そして、その宿るはずだった魔を、目的の場所で解き放つのだ。すると、宿り主を探す魔が、様々な現象を呼び寄せる。彼女が実際に感じた現象をいつでも引き起こせるというわけだ。

もちろん、彼女自身に宿る魔は、無尽蔵ではない。それどころか、彼女自体に宿る魔を使えば、それは彼女に様々な現象を引き起こさせるだろう。それは、病気であったり、怪我であったり。彼女に宿る魔が完全に失われれば、おそらく死ぬだろう。

では、どうすればいいか。ここでまた、才能が関係してくるのだ。

魔には、世界という還る場所がある。いや、これは正しくないかもしれない。正確に言えば、起きている現象も世界の一部なのだから。しかし、魔が還る場所は確実に存在していて、この世にそれはない。それを便宜上、待合室と呼ぶことにしよう。この世で、現象が終わると、その現象に宿っていた魔が、待合室に還る。そして、そこでまた自分が宿るべき現象が起こるのを待つのだ。

そう、才能のある魔法使いは、待合室から魔を持ってくる。意識を深く沈みこませ、待合室に待機している魔に干渉して、自分の中に宿る魔として変化させ、その魔を使っているのだ。

才能のない魔法使いは、この世に存在する、既に現象に宿っている魔を変化させて使う。そして、それは物凄く難しく、効率も悪い。何よりこの世に存在する物の中に代償を必要としている。出来ない訳では無いが、才能ある魔法使いと比べれば、その違いは一目瞭然である。

そうして、木の枝が伸びてくる、という現象を引き起こした才能に恵まれた黒い髪の少女は、獲物を仕留められなかったことにチツ、と舌打ちをした。

ウォルトの本能が警笛を鳴らす。このままでは殺されると。斧の男は、刻一刻とウォルトに近付いている。かといって、自分の腹を貫いている木の枝を抜いて逃げて、出血がひどく死んでしまうだろう。彼が生き残る為には、異形の力に頼るしかなかったのだ。

その選択肢には絶対に頼るわけにはいなかったのだが、死ぬのはもっと嫌だと本能が叫びだして言うことをきかない。そして、そんな意識の中では、当然封印を保つことは出来なかった。

ウォルトは、乱暴に腹に刺さっている木の枝を引き抜く。ズボツ、という音がして血が滴る。しかし、流れ出ている血はすぐに止まり、その大元である傷口も見ると癒えていく。傷跡すら残さずに再生した腹が、破れた服の隙間から見えている。

彼の目には、生きるという本能だけが見てとれた。斧の男を一瞥したウォルトが、斧の男とは逆方向に向かって駆け出す。人では出せない速度で逃げ出したウォルトを、斧の男達がそれ以上追うことはなかった。

怪我人の治癒を終え、シーニアに戻った町を守護する民は、先程見た異形の報告を町長に行っている最中だった。

「あの異形は、人によく似た形をしていましたが、傷を一瞬で癒し、人では出せない速度で逃走していました」

「あの赤い剣は危険な臭いがしました！」

「奴は放っておけない！」

「そうだ！今すぐに追って始末すべきだ！」

町長の家に一斉に押しかけた町を守護する民が、口々に先程見た異形に対しての報告や意見を飛び交わせる。斧の男は、冷静に事実を言っているが、他の、町を守護する民が全員冷静ではないようだ。皆、血走った目をして、異形を排除することを唱える。

いつだって、獣や異形から町を守ってきた彼らは、襲われる度にその原因を完全に潰していた。異形が逃走することなど、経験したことのない彼らが冷静でいられるはずがなかった。初めて、町を脅かす原因を取り逃がしてしまったのだ。

町を守護する民は、その興奮が醒めぬままに町長の家から出て行く。そして、町長の家に残ったのは斧男一人のみである。彼は、町

を守護する民のまとめ役であり、名をガレンといった。

「どうしますか、町長。あの異形は逃げていきましたが、また襲いにくるとも限りません」

「うむ……。しかし、その異形は傷を負って逃げ出したのじゃろう？ その様な行動は聞いたことが無い。新種の異形なのじゃろうか……。どのような様子だったか、もう一度話してもらおう」

「はい。最初にあの異形が現れたのは……」

ガレンはそこで言葉に詰まった。異形が言葉を発していたことを思い出したからだ。後に続いた光景と、あの赤い剣の印象が強すぎて、そのことを忘れてしまっていたのだ。

「どうした？」

急に言葉を続けなくなったガレンに町長が声をかける。彼が冷静な態度を崩して動揺している姿はとても珍しいものだったのだ。

「はい、町長。あの異形、いえ、あの者は最初に言葉を発しておりました。とても小さな声だったので他に聞き取れた者がいるかどうかは分かりませんが。確かに、人の言葉を発していました」

ガレンの言葉に、町長はひどく驚いた。ますます、その異形が新種なのでは、という疑いを強めた町長はしばらく悩んだ後言葉を発した。

「言葉が通じる異形であれば、交渉の余地があるかも知れぬ。危害を加えてこないのであれば無闇に殺す必要は無い。出会ったら殺さ

ずに生け捕りにせよ。無論、闇雲に探して捕らえる、ということもしなくてよろしい。向こうから接触してきたところに対応するのが賢明じゃろう」

町長の下した決断に一つ頷いたガレンは、町を守護する民が集まり、報告を待っているであろう『守護者の家』に向かつていくのであった。

20話 剣と逃走

森の中で火も焚かずに佇むウォルトの表情は苦みばしっている。

とうとう抑え切れなかった。死ぬまで一度も封印を破ることなく過ごすことは出来ないと思っていたが、ここまで早くに封印が破れてしまうとは思っていなかったからだ。悔し涙が彼の頬を伝った。自分で決めたことすら守れない自分に腹が立つ。

どういう顔でこの盟約者に破れた封印の修復を頼めばいいか、ウォルトには思いつかなかった。水黼もその姿がいつの間にか見えなくなっていた。水黼にまで見放されたかと思うと、自分の情けなさにウォルトの流す涙の勢いが強まったのであった。

そんなウォルトに、この夜初めて剣が声を発した。

「主、気にすることはない。人は失敗するものだ。この教訓を生かして次歩くときに転ばないようにするが良い」

剣の言葉はいつもより短かったけれど、そこにはいつもの長つたらしい言葉よりも多くの思いが詰まっている、とウォルトは感じた。

なにより剣は、何事も無いようにウォルトを人扱いしていたのだ。剣は自分の盟約者が人に戻ると宣言した以上、それを信じて疑っていないように思えた。改めて、剣の信頼を感じたウォルトであった。

ウォルトは、朝になったら異形の力を封印しよう、と決めたのだが、どうにも寝付けずに夜を過ごしていた。異形の血の封印が解けたのも原因の一つなのだが、いなくなった水黼のこととても心配していたのだ。異形の力があれば寝なくても大丈夫なものもあって、ウォルトは寝ることをあきらめた。どういう努力をしても今日は眠れる気がしなかった。

そして、そんなウォルトの耳に獣のものでも異形のものでもない

足音が聞こえた。

シーニアの町にある森側の大きな家に、たくさんの男達が集まっている。町の中で一際賑やかなその家では、ガレンが町を守護する民に町長の指示を伝えている最中だった。

「と、いうわけで向こうの出方を待つことになった。誰か質問のある奴はいるか？」

「そんな、異形を見つけておいて放置しておけというんですか？」

「向こうがいきなり襲ってくるかもしれないのに！」

「町の民が襲われてからでは遅いんですよ！」

男達は騒ぎ立てる。皆、異形への対処について不満があるようだったが、既に決まったことであつた。

ガレンの顔がどんどん険しくなっていくことに気付いた男達が徐々に静まり始める。彼は、質問はしていいと言ったが、意見を言えとは一言も言っていないのだから。

静かになった守護者の家に、低くて芯のある声が響く。

「質問がないようなら今日は解散だ。襲撃に備え、各自休息をとれ」

そう告げて守護者の家から出て行ったガレンを、男達は静かに見送った。

次々と男達は守護者の家から出て行く。しかし、その中でその場を動かこうとしない三人の男がいた。

「やっぱり俺はあの異形を放っておけない……。誰かが襲われてからじゃ遅いんだ！」

「ああ、俺もそう思うぜ。傷を負ったら逃げ出すようなずる賢いやつのやる事なんて卑怯なことに決まってるあ」

「出来れば、早めのうちに始末しておきたいですね」

「ガレンの旦那には始末した報告だけすれば許してくれるさ」

「そうと決まればさっさと行こうぜ！」

動こうとしなかった三人の男が動き出す。その男達は三者三様で、自信に満ちた顔をしている大柄な男。その背に大きな責任感を背負っている誠実そうな青年。知的な雰囲気を纏った細身の男。そんな彼らの共通点は、聞きわけがとても悪いことだった。

村の外で集合した三人は各々得物を携えていた。大柄の男は、その長身に見合った長槍が。誠実そうな青年には、真っ直ぐに伸びた剣が。知的な雰囲気の男には取り回しの良さそうな小柄の弓が。

お互いがお互いを一瞥した後、同じ動作で同時に頷き合った彼らは、暗闇の支配する森の中へと散っていった。

長槍の男が最初にその臭いに気づいた。足音を潜めながら、その臭いの発生している方向に近付いていく。間違はなく昼間嗅いだあの血の臭いだ、と確信しながら歩を進めていく。だんだんと強くなる臭いに比例するように、心臓が高鳴る。この危険な臭いが、異形を放置しなくて良かったという思いを強くする。確実に仕留める、と彼は心に決めた。

長槍の男が血の臭いをすぐそこに感じた時、ガサツ、と音がして何者かが逃げていく。血の臭いが離れていくのを感じるが、慌てたりはしない。長槍の男は、ピーー！、と指笛を吹いて作戦通りに物事が進んだことを他の二人に教えた。

剣を持った誠実そうな青年は、獲物と並走していた。作戦通りに獲物を追い込んでいく為に、常に気配を出しながら逃げる方向を制限していく。このまま走らせれば、あの獲物はあの場所へ追い込まれるはずだ。町への脅威を一つでも減らす為確実に仕留める、青年は心に決めた。

21話 剣と矜持

暗い森の中、一人で佇んでいたウォルトはその忍び寄る気配に気付いた。しかし、気配を消すのが下手なのか、ウォルトは簡単に距離と方向までもが分かってしまった。獣や異形の類ではない、と思つたウォルトは、追つ手あたりか、と目星をつけた。そして、追つ手と戦う気がさらさらないウォルトは、それとは逆方向に駆け出した。

追つ手を振り切る為に異形の力で走っているおかげか、後ろから感じる追つ手の気配はどんどん引き離されていく。このままどこにどう逃げようかと考えていると、もう一人の追つ手の気配に気付く。ウォルトは、どうやら向こうは複数のようだ、と呆れた。自分相手に複数で狩りに来た相手ではなく、人に複数で狩られる立場にいる自分に呆れたのだ。

そして、そのまま気配のしない方向に逃げていくと、聞きなれた波の音が聞こえた。

夜の海は、昼の海とは随分と違うようだった。真つ暗な風景の中で一箇所だけ月の光を反射して銀色に輝いている。夜の空で月だけがいつも通りに輝いていた。星はお休みのようだった。

ウォルトは、もう逃げられないと観念して、夜の海の風景を眺めた。逃げようにも、逃げる方向が制限されていて、唯一逃げられそうな方向にはシーニアの町があるのだ。これ以上町に近付くつもりはなかった。

ウォルトの逃げる方向を塞いでいた気配がその姿を現す。誠実そうな青年が、何の変哲も無い剣と共にウォルトに接近してくる。その剣は、ウォルトの扱う赤い剣の半分ほどの長さで、短剣よりは一回り大きい、といった具合である。その剣を両手で持って振りかか

つてくる。異形の力で強化されたウォルトの目には、遅いと感じる剣速だった。

剣筋を見極めたウォルトが余裕を持って後ろに避ける。しかし、それはかなわなかった。ウォルトの目の前で、その剣が加速して伸びてきたように感じた。青年は、自分の剣が傷付けたウォルトの胸があつという間に癒えていくのを見て、表情を硬くした。そして、その表情を保ったままさらに攻撃を加えてきた。

ウォルトは、焦りを感じていた。異形を狩りにきた追っ手に反撃するということが、自分が異形だと認めているような気がして、避けることだけに徹しているのだが、青年の剣が不可解な動きをして自分に届いてくるのだ。しかし、致命傷ではないのですぐに癒えていく。その度に青年の表情がどんどん陰しくなっている気がした。

ウォルトがこのままでは埒が明かないと一際大きく後ろに跳躍した。その瞬間を狙ったかのように、森の中から矢が飛んできていた。風を切る音に反応したウォルトは、飛んできている物体を避けようとするが、空中にいたので方向転換が出来ない。そのまま、ウォルトの右肩に矢が刺さった。

グハツ、と声が漏れる。刺さった瞬間の痛みがウォルトの意識を支配していく。声を出したウォルトを、青年は驚くような目で見ていたが、次の瞬間には我に返って攻撃を仕掛けていた。

ウォルトの右肩に刺さった矢は、どうやら威力の大きい矢ではないらしく、完全に隙を突いた最初の一撃で死ぬようなことはなかった。しかし、そのことに安堵している暇はない。ウォルトの目の前の青年は、矢が刺さった瞬間に生まれた隙を逃さないように猛攻を仕掛けてくる。それまでの不可解な動きが消え、真っ直ぐにこちらの急所を狙ってくる。そのためか、その剣速は先程とは比べ物にならないほど速く、剣筋も鋭い。

とうとう避けるだけの動きも苦しくなったウォルトは、赤い剣でその攻撃を受けることを決める。右肩の痛みは既に消えていて、何かが刺さっているような違和感だけが残されていた。青年の剣に打

ち合わせるように赤い剣を構えたウォルトは、信じられないものを見た。真っ直ぐにこちらの急所を狙っていたはずの青年の剣が、またも奇怪な動きをして赤い剣を避けた上でウォルトの腕に傷をつけたのだ。

傷は癒えていくが、読めない剣筋と森の中から飛んでくる矢がウォルトを追い詰めていく。そして、そんなウォルトに止めを刺すように森の中から長槍の男が飛び出してきた。

「やっと追いついたぜ……。さ、混ぜろや」

そう言うが早いか、誠実そうな青年に混じって長槍の男も同時に攻めてきた。

左側から迫る青年の不思議な剣を急所で受けないようにしながら、槍を避けることに集中する。どうせ青年の剣を避けることが出来ないうなら、と槍の攻撃を避けることに重点を置いたのだ。だが、飛んでくる矢にも気を回さなくてはならない。風を切る音が増え、矢に對しての警戒が難しくなる。しかも、放たれている場所が毎回違うので、それがさらに避けることを困難にしている。とはいえ、森の方から飛んでくることは分かっているし、威力もさほど高くないので、目の前の二人の男に集中する。

青年の剣がウォルトに小さな傷をつけては、異形の力がそれをなかつたことにする。長槍の男は、自分の攻撃が未だに当たっていないことが気に入らないらしく、時折舌打ちをしている。そして、そんな長槍の男に、絶好のチャンスがやってきた。

ウォルトは、長槍の男の影に隠れた矢に気付かず、跳んできた矢に右足の腿を射抜かれた。動きの鈍ったウォルトに青年の剣が襲い掛かり、その左腕を切り落とした。壮絶な痛みの中で自分の急所に襲い掛かる長槍を避けることが出来ないことを悟ったウォルトは、赤い剣を片手で操り自分の首の前に動かした。

そして、長槍の男は自分の槍の軌道上にその赤い剣があることを

認めた上で、その軌道を変えることはなかった。赤い剣ごと、異形を貫こうと思ったのだ。その自信ゆえにウォルトは生き長らえることができた。その長槍は、赤い剣の腹に当たったが、それを貫くことも動かすこともなく甲高い金属音を出して弾かれた。

長槍の男は啞然とした。自分の出した本気の一撃が、力尽きる寸前の異形の片手の力だけで防がれたのだ。自分の失策に気付いた長槍の男は自分の得物を構えなおそうとしたのだが、手に伝わった衝撃がそれを許さない。

そんな長槍の男の様子を見て青年も剣を止めた。横で爆発しそうになっている長槍の男の気配は、それほど凄まじいほどだったのだ。目に見える速度で切り落とされた左腕が再生していくウォルトを、しばらくの間見下ろしていたその男の感情がとうとう爆発した。

「なんなんだよオメエは！異形なら大人しく殺されとけよオ！！」

目の前で腕を生やしていくウォルトに向かって吐かれた言葉は、ウォルトにとって我慢できないものだった。異形に対して怒って言葉を吐きつけている長槍の男を驚いて見ていた青年が咎めるように言う。

「何をしているんだ。殺されるぞ！早く離れろ！」

しかし、その声を聞いた長槍の男が反応する前に、ウォルトが声を上げた。

「異形なんかと一緒にしないでくれ！俺は異形になんか堕ちない！」
そうして立ち上がったウォルトは、完全に再生した左手で、右肩に刺さっている矢を引き抜いた。ズボ、と嫌な音がしたあとに、傷がなくなる。ついでに腿に刺さっている矢も引き抜いた。

そんなウォルトの様子を見ていた長槍の男が吐き捨てるように言う。

「そんな姿を見せて異形ではない、だと？冗談はやめろ」

しかし、これはウォルトにとっては譲れない一線だった。

どうにかして自分が異形ではないことを、人に、知って欲しかったのだ。もう、異形と同じような扱いをされなくなかった。

人に戻りたい、というウォルトの強い意志を感じ取った赤い剣が、彼の心に語りかける。

——封印を修復するぞ、異形の力を抑えろ……

突然目を閉じたウォルトを警戒するように、二人の男が身構える。しかし、彼らが想像したような悪い出来事は起こらなかった。赤い剣が白くなっていくにつれ、先程まで感じていた強い血の臭いが消えていく。

「そんなことでは騙されんぞ！」

手の痺れが切れたのか、再び長槍を構えなおした男が叫ぶ。そして、そのままウォルトに向かって長槍を突き出した。

異形の力を封印したウォルトにその動きは見えず、まったく動かないウォルトを見て長槍の男は勝利を確信する。しかし、どこからか飛んできた水の刃が彼の長槍を襲い、その穂先は何もとらえることなく空中に舞った。水の刃を放った主は、ウォルトの肩に飛び乗ると、その青い毛を逆立てて威嚇を始めた。

「まだ異形がいたか……」

長槍の男が呟くように言うと、誠実そうな青年がそれを非難した。

「違う。あれはおそらく精霊の類だ」

そこまで言ったところで、森の中から一人の知的な男が駆け寄ってくる。

「マツハ、攻撃をやめろ。彼は異形ではない。水刃の精霊がそれを証明している。それに、会話の成立する異形なぞいてたまるか」

マツハ、と呼ばれた長槍の男が、舌打ちを一つしてウォルトから離れて森の方へ歩いていく。その背中から、まだ信じたわけじゃないぞ、と捨て台詞のようなものが聞こえた。しかし、捨て台詞を吐いて森の方へ消えていこうとしていたマツハの足が止まる。そして、森の方から怒りを抑えた低い男の声がした。

「おい、お前ら。そこで何をしている？」

その男は、大きな斧を持っていた。

22話 剣と町

斧の男は圧倒的威圧感を放ちながら、マツハに近付いていく。蛇に睨まれた蛙のように微動だにしないマツハに、拳骨の刑が下された。

斧の男が頭を押さえているマツハを引き摺ってこちらに歩いてくる。斧の男は、ウォルトと水黽の姿を認めると済まなそうな声を出した。

「済まない。俺は、町を守護する民をまとめているガレンだ。こちらとしては、自ら襲撃を仕掛けるつもりではなかった。この阿呆共を許してやってくれないか？」

「俺は異形じゃない。こちらから襲う気もないんだ」

ウォルトがそう返すと、マツハが、誰が異形じゃないって？、と言いつ放つ。次の瞬間ゴツン、と良い音がした。二度目の拳骨を受けて、またしても頭を押さえるマツハを無視して、ウォルトは続けた。

「でも、完全な人でもない。だが、体はそうでも、心まではそうじゃないんだ！信じてくれ！」

ウォルトは、ガレン達のことを完全に信じていたわけではなかった。しかし、自分が異形でないことを信じてもらうためにも、まず自分が相手を信じることにしたのだ。

そんなウォルトの真直ぐな姿勢が功を奏したのか、ガレンは満足そうに一つ頷くと、ウォルトと誠実そうな青年、知的な男について来い、と身振りで示して町の方へ歩き始めた。マツハはまだ引き摺られていた。

シーニアの町へ歩いていく途中、日が昇っていくのを感じる。ウォルトは、肩に乗っている水鼬と話そうと思っていたが、見知らぬ四人についている状態で水鼬と話せるような精神を持っていなかった。それを分かっているのか、水鼬から話しかけてくることもない。それがウォルトには有難かった。

しかし、水鼬は確かに話しかけてはこないが、その身体をウォルトの頬に擦り付けている。青い毛並みは柔らかく、くすぐったかった。ウォルトは目の前の四人を警戒したかったのだが、水鼬にそれを邪魔され、何ともいえない気持ちで四人の後についていった。

シーニアの町の入り口に着いたウォルトは、その場で待つようにガレンに言われ、入り口で待機していた。誠実そうな青年が、ウォルトを見張るように隣に座っている。ウォルトがその様子を見ると、その青年と目が合う。そのまま見詰め合うことにはならず、先に目を逸らしたウォルトに、青年が話しかけた。

「俺の名前はヴァンだ。お前が襲わないと言うなら俺はそれを信じるよ。精霊と契約できるのは、正しき者だけだからな。俺はそれを知っている。これから君が何をするのかは知らないけど、とりあえずよろしく」

そう言って立ち上がり、握手を求めてくる。

「俺の名前はウォルトだ。こちらこそよろしく」

握手に応じながらウォルトが言った。二人の手が重なったところに、水黽が乗っかって存在感をアピールしている。どうやら水黽はヴァンのことを警戒していないみたいだった。

「そ、そうですね。彼は信用できます」

水黽の声がしたと思ったのだが、信用できます、と言われた当の本人はまるで反応していない。そのことを不思議に思ったウォルトは首を傾げた。

「契約した人以外に、わ、私の声は聞こえませんか……？」

「我も同じだな。主、上手く事が運ばれてよかったの。殺されるのではないか、と心配しておったぞ。主、我の声に返事したいのであれば、声に出さずとも良いぞ。水黽も同じだ。しかし、なつかしいなこの地は。あの頃とあまり変わっておらぬように見えるな……」

ウォルトは初耳だというように剣の方を向く。握手したまま、町の入り口に立てかけてあった白い剣に、急に振り向いたウォルトを不思議に思ったヴァンが快活に笑った。

笑われたことで落ち着いたウォルトがヴァンの方に向き直って苦笑し、握った手を放す。水黽のお墨付きをもらったヴァンをもう一度よく見ると、その短い金髪が目に入る。ノアのものよりも短いな、と思い、ふいに村のことを思い出す。

この町の入り口は、村のものとは比べて広い上にきちんとした造りになっている。それだけに、この町の大きさはウォルトのいた村よりも大きいだろうと予測する。山から見下ろした時には、あまり違いが分からなかった。

まだ見ぬこの町のことにウォルトが考えを巡らせていると、一つの足音と共にウォルトを呼ぶ声がした。

「いつまで抜き身のままでは困るからこれを使いなさい」

ガレンが、鞘と帯の様な物をウォルトに渡した。鞘と帯は一体になっていて、ウォルトの体格より少し大きめの人用に造られた物のようだった。触ってみれば、帯の様な物は獣の革でできているようだった。

ウォルトが渡された鞘と帯を手を持ち呆けていると、ヴァンがそれを取り上げ、ウォルトに巻き付け始めた。慣れた手付きのヴァンに全てを任せていると、いつの間にかそれが巻き付いていて、鞘が右肩の後ろあたりに見えた。

そこに白い剣を収める。しかし、この白い剣の為に作られたものではないので、体を動かすと鞘の中で刀身が暴れてしまう。しかし、ガレンの心遣いを無下にすることは出来ないのでウォルトは一言、

「ありがとう」

と、言って感謝を表した。

「こいつもだ。そんな服では困るだろう」

そう言っただけで渡してきた服は、ウォルトの村では見かけない素材の物でできているらしく、さらさらとした肌触りが特徴的だった。もちろん、穴などは空いていない。

「ヴァン、川へ案内してやれ」

「はい、わかりました」

ガレンがそう言うと、ヴァンはそれに素直に従っていた。ヴァンが

ウォルトについてくるように手で合図をする。

ヴァンについていきながら、ウォルトは先程のやり取りで覚えた違和感の正体と戦っていた。

ガレンの言ったことが正しかったならば、このヴァンという青年は、ガレンの命令を聞かない奴だということになる。しかし、先程のやり取りからは反抗心の欠片も感じない。この青年はなぜ、命令違反をしてまで自分を襲ってきたのだろうか……。

ウォルトがそんなことを考えていると、川のせせらぎが聞こえてきた。村の川とはまた違った、おだやかな音だった。ヴァンは、あそこだ、とウォルトに教えると、近くにあった木の根元に座り込んだ。さっさと行ってこいと言っても言うように手をひらひらさせている。

川についたウォルトは、今着ている穴だらけの服を脱ぎ捨て、川に勢いよく飛び込んだ。ザブン、と音がして水が大きく跳ねた。これまで川を見かけたら水浴びをしていたが、山を降りてからはまだ一回もしていなかった。ウォルトは海で水浴びをしようとしたのだが、剣に止められて出来なかったこともあった。

体を完全に沈めると、川の流れが少し強くなったように感じる。しつかり川底に足を付いて、流されそうになるのを抑える。自分はいつまで耐えられるのか、試したくなる。ふと、頭に衝撃を感じたウォルトは、川から頭を出した。頭の上には水黽が乗っていて、ウォルトの顔の前にその銀色の輝きを放つカマのような尾を垂らしている。

ウォルトは、水黽を両手で抱えると川から上がり、適当に水を払う。ガレンのくれた服に腕を通したウォルトは、その初めての感触に不思議そうな顔をしていた。水黽は、ぶるぶると体を震わせた後、ウォルトの肩に飛び乗った。

そして、ウォルトにとって最大の難関がやってきた。先程つけてもらった鞘と革帯をまた自分につけなくてはならない。ヴァンは手

馴れた手付きでそれをやつてのけたが、ウォルトにとっては結構難しく手間取っていた。少し経つと、先程より不恰好ながらも一応機能するように着用できていた。

ウォルトがヴァンのところに戻ると、ヴァンは一つ頷いてまた歩き始めた。今度は、ヴァンの横に並ぶように歩いた。

「お、今度は自分で着けたのか。初めてにしては良い方だと思うぞ」
「そうか、ありがとう」

なんだかよく分からない会話をしながら歩いていると、町の入り口が見えてくる。

町の入り口に近付いたウォルトは、ガレンとマツハ、知的な雰囲気気の男、その他野次馬のような人々が多数待機しているのを見付けて顔を強張らせた。今までの行動が全て罠で、全員で取り押さえに来たのかと思ったウォルトは、ヴァンの方に勢いよく向き直り疑いの目を向ける。しかし、ヴァンの顔には敵意はまったく見られないむしろ、何をしているんだろう、といった感じの困惑の表情を浮かべていた。

ウォルト達に気付いたガレンが、さっさと来い、という風に手を振る。

町の入り口に着いたウォルトの目の前にガレンが歩いていく。

「ようこそ、精霊と共にある旅人よ。この町はシーニアだ。ゆっくりしていつてくれよ」

「え、あ、ウォルトです。よ、よろしく願います……」

これまでそんなことを一度も言われていないウォルトは困惑しな

がらもなんとか返事をした。

しかし、その努力は実らず、まるで水黽を思わせるようなたどたどしい返事をしたウォルトを見て、野次馬達は笑っていた。

しかし、その笑いは嘲笑のようなものではなく、歓迎の意が込められたような笑いだった。

23話 剣と違い

シーニアの町に入ったウォルトは、畑を耕していた。なぜこうな
ったかと思いい出してみると、最初に言われたガレンのあの言葉のせ
いだと気付く。

「歓迎するが、食べ物が欲しければ働きが必要だぞ？この町では皆
で助け合って生きている。この町に滞在する間は、ウォルトにも働
いてもらうぞ」

そう言い放つが早いのか、ついてこい、と言わんばかりに歩き始め
る。野次馬達が道を空けて、そこをガレンが通っていく。ウォルト
は、周りにいる野次馬達に頭を下げながらガレンの後をついていく。
そして、ガレンの案内の元辿り着いたのが、この畑であった。も
う畑の中で作業している人もちらほら見える。畑は柵のような物で
囲われていてとても広かった。

ウォルトは、ガレンに鋤を渡された後、既に働いている人に近付
き、挨拶をする。そして、ウォルトに課せられた仕事は、畑に溝を
作る事だった。どうやら、ここは新しく苗を植える畑らしく、うね
を作る必要があるらしい。作物が育つ際に、土がほぐれている方が
良いから溝を作ってほしい、ということらしかった。白い剣が鞘に
入ったままウォルトの分らないことを補足してくれたので、彼は
なんとなくだが理解できていた。

ウォルトが無心に土を掘って溝を作っていくと、いつも使わない
部分の筋肉が悲鳴を上げ始めた。くわで、溝の横に土の山が作られ
ていくのだが、穴が深くなるにつれて、くわを移動させなければな
らない距離が伸びる。その為、決して楽な作業ではなかったのだ。

ウォルトは決して修練を怠けていたわけではなかった。むしろ、村にいた頃にはグレイツの倍ほども修練をしてきたはずだった。しかし、鍛えている部分が極端過ぎていた。さらに、最近是比较的軽い白い剣を使っていた。そのせいか、くわがやけに重く感じた。

自分の体の悲鳴を浴びながら作業をした結果、やっとのことで一列分の溝を作ることができた。既に日は傾いていて、ウォルトの影が長く伸びていた。

「おーい、ウォルトー！」

畑の入り口から名前を呼ばれたウォルトが振り向くと、そこにはヴァンが立っていて大きく手を振っている。ウォルトがヴァンのところまで重い身体を引き摺るようにして歩くと、

「なんだ、農作業がそんなに大変だったのか？それより、今日は俺の家に泊まれよ。腹も減っただろ？」

「あ、ああ。ありがとう」

ヴァンの家に歩き始めたのだが、ヴァンは白い剣に負けないくらい話すことが好きなようで、ウォルトが口を挟む間すら与えずにずっと喋っていた。この町では獣の肉よりも、魚の方をよく食べるらしい。漁をする者達が魚を獲ってくるのだが、獲れた魚全てを彼らだけで処分することはできないので、干物にしたり、他の町の民に分けたりしているらしい。農耕や獣の狩猟なども行われているが、それは漁の補佐的な扱いらしい。

ヴァンの家に着いたウォルトは、その家の造りに驚いた。ウォルトのいた村ではあまり使われていなかった木材が多く使われていて、がっしりとした雰囲気を出している。屋根には見たこともない素材が使われていた。太い木の幹の表面のような感じを受ける。

「さ、遠慮しないで入ってくれ。俺一人で住んでるんだ、ここ」

明らかに一人だけで住むような大きさの家ではないと思ったウォルトだが、この町はそうなんだろう、と結論を下して家の中に入った。

「ちょっと待っててな。今から飯作るから」

「料理が出来るのか？」

「もちろん出来るぞ。俺だけじゃなくて、この町の人間なら何かしら料理が出来るさ。と、いうわけだから適当に時間をつぶしておいてくれ」

ヴァンが家の奥に入っていったのを見て、ウォルトはヴァンの家から出た。体は疲れきっていたが、剣の素振りがしたかったのだ。異形の力を持つていても、ヴァンの攻撃を避けることが出来なかった。あのとき、自分が本気でヴァン達を殺しにかかったらどうなっていただろうか。そのことが気にかかって、いても立ってもいられなくなつたのだ。

ウォルトは、右肩の後ろに見える白い剣の柄を掴む。ガレンからもらった背にある鞘から白い剣を引き抜く。いや、抜けない。途中までは引き抜けているのだが、ある場所を境に腕の長さが足りなくなってしまう。ウォルトが悪戦苦闘していると、離れたところで様子を見ていた水鼬が溜息のようなものをついていた。

「う、ウォルトさん……？」

「主、戯れておるのか？」

呆れた声を出す剣を無視して、なんとか引き抜こうとする。ウォルトが白い剣を引き抜くことが出来たのは、鞘と剣を引き離すように動かすことを閃いてからだ。どうやらこの革帯は伸縮性の高い素材らしい。ウォルトが剣を引き抜くことに成功し、よし今から素振りを始めるぞ、と意気込んだとき、ヴァンの呼び声が聞こえた。

台に並んだ食べ物達を見て、ウォルトは啞然した。魚からはとても美味そうな匂いが漂い、その焦げ目も食欲をそそく。穀物の粥からは白い湯気がのぼっていた。これをヴァンが作ったのだろうか。ウォルトがヴァンの顔をじっと見ていると、

「おいおい、毒なんか入れてないぞ。冷めないうちに食べよう。誰かと食べるのは久々なんだ」

ニコニコしながらヴァンが言う。その顔はとても嬉しそうで、ウォルトは彼が嘘をついているとは思えなかった。もちろん、彼の作った料理も、見た目に嘘はなくても美味しかった。

ウォルトはヴァンの作った料理を食べながら、自分はまだまだだな、としみじみ思った。

24話 剣と過去

ウォルトが自分とヴァンの違いについて悩んだ次の日の朝、朝早くから農作業にいそしんでいた。あと七列分の溝を作ってほしいとのことであつた。一日一列ぐらいで頑張ってくれ、とその畑で働いている者に言われたが、ウォルトとしては一日二列を目安に作業を行うつもりだつた。昨日初めてやった際には、半日で一列の溝を作ることが出来たのだから一日使えば二列作れる、という考えでこの作業を始めた。

しかし、昨日からの疲れがまだ完全にとれていないのか、作業の進む速度が昨日より遅くなっている。重い身体に鞭打ちながら作業を進めていたウォルトに、同じ畑で働いている一人の男が話しかける。

「そろそろ昼飯にするが、食べるか？」

ウォルトは頭を横に振って、作業に戻つた。森にいた時も一日一食か二食だつたウォルトには、昼に物を食べる、ということをする必要性が感じられなかった。そのうえ、太陽が一番高く昇つた今でもウォルトはまだ一列目の溝すら完成出来ていなかったのだ。

昼飯を食べている者達に眺められながら、ウォルトは黙々と作業を続けた。白い剣の柄とは違い、このくわの柄は、ウォルトの手のひらを容赦なく痛めつけていく。照り付ける太陽までもが敵に回るが、ウォルトは溝を作るのを止めない。自分で決めたことくらいは自分で守ろうと思っていたのだ。

太陽が落ちるころ、やつとのことで作つた二列の溝を誇らしそうに眺めているウォルトの姿があつた。

「ええ！一日で二列も作ったのか！？なかなか頑張ったなー！」

その日の夜の食事でウォルトがヴァンに昼間のことを言うと、ヴァンはとても驚いていた。

シーニアに住む者達は、基本的にのんびりとした者が多く、ゆったりとした時間が流れている、と水鼬がウォルトにだけ伝える。

「俺も昔は、畑で働いてたんだぞ。街を守護する民に入ってから全然してないけどなー」

何もない場所を見ながらヴァンが呟く。その瞬間にヴァンの目が曇る。ウォルトはそれを見てしまったが、何があったか等とはとても言い出せなかった。

ウォルトは彼と会ってまだ二日しか経っていないのだ。そんな自分に関心な悩み事を話してくれるとは思えなかった。

「何か動きはあったか？」

「今のところは、何もないです。真面目に働いているようで」

「そうか、何もしてこないならそれはそれで良い。これからも頼むぞ」

「了解」

夜明け、守護者の家でガレンと一人の男が話している。大きな守

護者の家には、彼ら以外の人物はいない。彼らは、その中で声を抑えて話している。余程他人に聞かれては不味いことを話しているのだろう。

守護者の家に人の気配が近付くと、二人は何事もなかったかのように離れる。二人の男の寝ずの番が終わったことを告げる入り口の人物を、二人はそれぞれに見つめていた。

完全に太陽がその姿を現すと、シーニアの町には活気が満ちる。

その活気は守護者の家にも伝わって、守護者の家の雰囲気も賑やかなものになっている。しかし、守護者の家の奥に敷いてある寝具の上で何事もないように寝ている者もいる。先程まで寝ずの番をしていたガレンだ。

そんなガレンに近付く黒髪の少女の姿がある。

「起きて、ガレン。異形が来るよ」

少女はガレンをやや乱暴に揺さぶりながら声をかけている。

「まだ遠いけど、近付いてきてる」

少女の呼び掛けが通じたのが、ガレンがのそりと頭を上げる。

「なんだ、何か用か？」

体を起こしたガレンが少女に問い直す。少女はとても面倒そうな表情をしてガレンに再度伝える。

「異形が出た。こっちに近付いてきてる」

その言葉を聞いた瞬間、ガレンの目は冴え、勢いよく起き上がる

と立て掛けてあつた彼の得物を掴んだ。ガレンの大声が守護者の家中に響き渡る。

「異形が出たぞ！皆、今すぐ向かうぞ！」

「了解！」

「準備できました！」

「いつでも行けるぞ！」

それまでの和気藹々とした賑やかな雰囲気が一変して、戦の前の緊張を紛らわせる男達の声で埋め尽くされる。その先陣を切るようにガレンが守護者の家から飛び出していく。その真後ろを黒髪の少女がついていく。町を守護する民たちもそれに続くように次々と守護者の家から飛び出していった。

あとに残った守護者の家は、先程までの騒がしさが消え、静寂に包まれていた。

町を守護する民たちが、森を駆ける。その先頭、ガレンと黒髪の少女が会話をしている。

「今回こそ、異形を仕留めてみせる」

「セラ、まだあのことを気にしているのか？」

いつの間にかガレンに追いついて並走していた、セラと呼ばれた黒髪の少女が木の根に足をとられてよろける。少女の表情に焦りが浮かぶ。しかし、完全に倒れきる前にガレンが少女を支えることに成功する。少女の顔に浮かんだ焦りは消え、元の平然とした表情に戻っている。

「そういつわけじゃないから」

「あまり気に病むなよ」

「分かってるから。今回は大丈夫」

先頭の二人の会話は打ち切られ、町を守護する民たちはどんどん異形に近付く。

そして、彼らが森にかかる巨大な影に気付いたのは、その異形を視認してからだった。

25話 剣と守護者達

町を守護する民たちは、その異形の大きさに度肝を抜かされた。シーニアの町にある守護者の家程の大きさがあつたからだ。守護者の家はシーニアの町では三つ目に大きい建物だ。町を守護する民の二十五人全員が寝転がっても大丈夫である。

しかし、町を守護する民たちはその大きさだけに圧倒されている訳ではない。その異形は、彼らが今まで討伐してきたどの異形よりも醜悪な姿をしていたからだ。その姿は、一言で言うとおどろく大樹。しかし、その幹は、普通の木とは似ても似つかない禍々しい赤紫色をしている。幹の所々にあるコブからは、濁った黄色の液体が流れ出ている。しかし、その液体はなかなか幹を伝わらずに、コブの周辺で動きを止めている。

異形の姿に圧倒された町を守護する民たちは、一瞬で我を取り戻し、攻撃に移る。十人程の弓を扱う射手達が、一斉に射掛ける。前衛の者達は、じりじりと近寄りながら異形の動きを観察している。バスツ、と音を立てて矢が異形の幹に突き刺さる。しかし、すぐに異形の表皮が矢もろとも剥がれ落ちていく。その剥がれ落ちた表皮は地面に着くと砂となつて森の中に消えていった。そこには、矢だけが残されていた。

しかし、射手達は勝機を見い出していた。なぜなら、表皮が剥がれ落ちた部分がむき出しになつていて、そこからなら攻撃の効果が見込めると思つたからだ。

「あそこが弱点か！？今ならいけるぞ！」

「おう！今のうちにやるぞ！」

表皮の弱点に、射手達が攻撃を始める。矢が刺さった場所からは、コブから出ているような液体が染み出てきていた。

よし、いける。という彼らの希望を振り払うかのように、異形は反撃を開始した。

その大樹のような異形は、その場で跳躍すると同時に空中で一回転して着地する。着地した瞬間、地震の様な揺れが町を守護する民達を襲った。揺れる足場に立つこともままならない彼らを、異形の次の攻撃が襲った。それは、異形のコブや傷から出ていた黄色い液体だった。空中で回転した際に飛ばしてきていたらしい。

「ガハッ！」

一人の前衛の男の腹あたりに、液体の塊が直撃する。それは酸や毒物の類ではなかったようで、直撃を受けた男は元氣良く動いている。しかし、地面に倒れたその男は自力で起き上がることが出来ないようだ。

「くっそ、何だこれ……。粘ついててとれねえ！」

腹から腰にかけて男にへばり付いているその液体は、男と地面をくっつけたままの状態にしている。そして、大樹のような異形からその男へ追撃が放たれた。

異形の上部にある葉の部分から、一枚の葉が落ちてくる。その葉は人の頭ほどに大きい。しかし、ゆっくりと落ちてくる。そして、その動けない男に容赦なく襲い掛かった。それまでゆっくりと落ちていた異形の葉が、獲物を見付けたとばかりに加速したのだ。

ザクツ、と音がして男の叫び声が響く。異形の葉は男の右腕にかすっただけのようで、地面に突き刺さっていた。その男が自分だけでは起き上がれないことを察した者達が、男の救援を始める。一人

の剣を持った者が、粘性の高い黄色い液体を切り払うようにして処理しようとするが、上手くいかない。その黄色い液体に触れた瞬間に剣速が落ち、その剣は黄色い液体に捕らわれてしまった。

「離れて！」

射手の集団の中に紛れていた黒髪の少女、セラが異形の液体に捕らわれてしまった男を救援している者達に呼びかける。

男の近くに誰もいないことを確認したセラは目を瞑ってその集中力を増した。

次の瞬間、黄色い液体だけが強風に吹かれたように飛んでいった。その液体は生みの親である大樹のような異形にぶつかり、さもそこが自分の本当の居場所だと言わんばかりにへばりついて動かなくなった。

セラは自分の魔法が上手くいったことに安堵してふう、と溜息をつく。しかし、まだ異形は死んでいない、と緩んだ自分の心に鞭を打って集中力を再び高めていく。世界で待機している魔を自分色に染め上げて、自分の元に集まるように仕向ける。自分色の魔が集まってくるのを感じたセラは瞑っていた目を開いた。

すると、先程の跳躍で地面に顔を出していた大樹の異形の根が、前衛達を襲っているのが見える。その中で、襲いくる異形の根を一本一本確実に切り裂いていく誠実そうな青年の姿と、まとめてなぎ払うようにして歩を進めるガレンの姿が目立っている。しかし、彼らの活躍を見るセラはどこか複雑な表情を浮かべている。

異形の根の猛攻に耐え切れず、弾かれるようにして空中に飛ばされた一人の男が、地面に衝突する直前に減速する。セラの作り出した風のおかげだ。彼は、ゆっくりと着地して異形の根に打たれた部分を庇いながら立ち上がった。満足に動けなくなった彼は後方に避難を始める。

その間にも距離をつめるヴァンとガレンは、とうとう異形の根元に辿り着く。二人は、その場で襲い来る根を切り払いながらも、徐々に異形の幹に傷を増やしていく。そして、一度攻撃して表皮の剥がれた部分をもう一度斬ると、異形の発していた声の質が変わり、悲鳴のようなものになる。

笑みを浮かべ始めた二人は、そのまま攻めを維持している。

「このまま攻めるぞ！」

「了解です！ガレンさん！」

異形の根の攻撃が一旦止んだ瞬間に二人は声を掛け合う。そして再開されるであろう異形の根の猛攻に備え、二人が異形の行動に注目する。すると、大樹の異形はその二人の思考の裏をかくようにまた大きく跳躍し空中へ浮いた。

大樹の異形が跳躍を始めた瞬間の衝撃が地面を伝わっていく。その根元にいた二人は、大きな揺れに襲われた。体勢を保ちながら異形の影が自分達の足元に重なったのを見付けた二人は、急いで後ろに跳ばうとする。しかし、足場が安定せずに距離を稼ぐことが出来ない。そんな彼らを助けたのは、やはりセラだった。

森の中に大量に生えているそこら辺の木々が、手をつなぎ合わせるように枝を生やしていく。それは、異形を受け止める網になり、異形の落下地点を守ろうとしていた。しかしまだその網は、薄くて細い。だんだん太くなっていく網に異形が落下していく。異形がその網に落下し、その重みを受け止めた網が大きくたわむ。

セラは、あれじゃ受け止め切れない、と判断し次の魔法の為に、自分身の魔を土に宿る魔へと変化させていく。しかし、それは不意に飛んできた石ころによって中断された。

そして、行き場を失った魔は暴発した……。

大樹の異形は、その真下にあつた枝の網に受け止められていたが、もうその重みに枝の網が耐え切れないようだった。枝がブチブチと音を立てている。枝の網の下にいる二人は、なんとか異形の着地範囲から逃げようとしているが、間に合いそうにない。その状況をただ見ていた射手達は、もう駄目か、とあきらめの表情をしている。しかし、それを吹き飛ばすような、力のある咆哮が森に響き渡る。

「オラアアアアアアア！」

咆哮の主が持っていたのは長槍。両手で持っていたそれを片手に持ち替え、勢いよくブン投げた。

投げ出された長槍は綺麗な直線を描いて、大樹の異形のコブの部分に突き刺さった。異形のコブに突き刺さった長槍は、その勢いを落とすことなく異形を貫いていく。やがて動きを止めたその長槍は、異形を深く深く抉っていた。

網の上に乗っていた大樹の異形が大きく横に傾いていく。周りに生えている木々を薙ぎ倒しながら、大樹の異形は地面に倒れこんだ。異形の上部は地面にめり込み、根元はまだ枝の網の上にあつた。

街を守護する民達は、これを勝機と攻め立てる。しかし、長槍の一撃は相当な一撃だったらしく、大樹の異形は既に虫の息のようだった。無抵抗の大樹の異形が完全に砂になるまで、その攻撃は続けられた。

後方では、魔法の暴発により自分の真下から砂を生み出してしまったセラが、その砂で埋もれていた。助け出された彼女は、異形の落下地点にいた二人が生きていることを知ると、安堵の表情を浮かべた。次の瞬間には舌打ちを一つしていたが。

こうして、一人の犠牲者も出さずに街を守護する民達が異形を討伐することに成功していた頃、ウォルトはヴァンに教えてもらった溝掘りのコツを使い、一日に三列も溝を作っていた。満足そうな顔を浮かべるウォルトを、畑で働いている他の者達が笑顔で迎えていた。

26話 剣と始動

夜、ウォルトとヴァンは、ヴァンの家で今日あったことを話していた。まだ三日目だというのに、既にお互いの警戒の色は薄い。それは、ウォルトの真面目な働きぶりをこの町に尽くしている姿だと勘違いした町人が、ヴァンに噂話を持ちかけるようにして教えたからだ。町人の本当の目的は、剣を背負いながら農作業をするウォルトがどんな人物かと聞くことだった。

もちろん、ウォルトは別にシーニアの町に尽くそう、などとはあまり思っていない。彼は自分で作った目標を乗り越えているだけだ。そして、その手助けをしてくれたヴァンに感謝をしている。

そうしたことあつて、二人の警戒度がお互いに薄まっているのだ。そしてウォルトはまた新しい目標を立てることになる。

「聞いたぞウォルト。どうやら農作業を頑張っているらしいな？」

「え？ああ、そうかも知れない。でも、俺はただ自分の立てた目標を達成しているだけだ」

「そうだとしてもだ。農耕の民の一人が、剣を背負って真面目に作業する姿を見て、初めは、いつ背中の剣で切られるかとビクビクしてたけど、それは要らぬ心配だった。とか言ってたぞ」

「そ、そうなのか」

このまま何事も起こさずに生活していけば、この町の者達は自分を完全に人扱いしてくれるだろうか、等とウォルトが考えていると、ヴァンが思い出したように言った。

「あ、そういえば、明日は狩猟の方を手伝ってもらう予定になっているぞ。朝、案内してやるから」

ウォルトはヴァンに向かって頷くと、自分の為に用意された寝具の方へ移動していく。

鞘に入っただままの白い剣を壁に立て掛けて、ゴロンと横になる。そのままウォルトは眠りに落ちた。

「おい、起きろー！」

何者かに揺さぶられたウォルトは、なんとか目を覚ます。ウォルトは特に朝が苦手というわけではなかったが、昨日は深い眠りについていた。警戒心の薄れと、溝三列分の疲労が重なってこうなってしまったようだ。

ヴァンに起こされたウォルトは、ヴァンの家から出ると一つ欠伸をした。外はまだ暗く、太陽はまだ顔を出していない。

「狩猟つてのは朝早くからするものなのか？」

眠そうな声でウォルトが聞くと、ヴァンがその姿を見て笑いながら言う。

「漁はもつと早いぞ。まあそれは手伝う心配はなさそうだな」

そう言っただけでヴァンはウォルトを待ち合わせの場所に案内してくれた。そこには、七人ほどの男女がいた。男は小さいナイフを持っている、女は弓を背に抱えている。

「お、来たか。ヴァン、そいつが噂の彼か？」

男達の中でも一際目立っている男がヴァンに声をかける。その存在感は、彼の髪型が原因だろう。彼の頭の上には、鳥の巣のようにばさばさの髪の毛が存在していた。

「よう、ウォルト。俺はケントだ。ここまとめ役をやってる。狩猟は得意か？」

「よろしく。一応森の中で生きられる程には出来る。そんなナイフでも獣って狩れるのか？」

ウォルトが、ケントの持っているナイフを指差して言う。

「おい、まさか狩猟でその背中 of 剣を使うつもりか？手入れが大変じゃないか？狩猟では、手入れが楽に出来るナイフを使うのが、シーニア流だ。と、いうわけでこれがウォルトの分だ」

ケントがウォルトに向かってナイフを放り投げる。それを受け取ったウォルトは、ナイフを鞘から出して、刀身を確認する。そのナイフは、先にいくほど細く鋭くなるように作られているようだ。牙のようだ、とウォルトは思った。

ナイフの確認をしたウォルトは、それを鞘に収め、ケントの後ろにいる狩猟の仲間達に声をかけた。

「ウォルトといます。よろしく」

「ライドだ。」

「あたしはリデルよ。よろしくね」

ライドと名乗った男は、必要最低限の言葉で返した。彼は、赤い

髪を頭の後ろで結わえている。瞳の色も、髪の色と同じような燃えるような赤い瞳だった。全体的にスラリとした体つきで、がっしりとしたケントとは反対の体格をしている。

リデルは、明るいお姉さん、といった感じで、明るい茶髪が肩の部分で切りそろえられていた。キリッ、とした目付きが印象的だ。

ウォルトが一通り挨拶を終えると、ケントとライド、リデルを残して他の四人は森へ入っていった。それをウォルトが眺めていると、「狩猟の時は基本四人一組なんだ。俺達のチームは、ナイフ三人に射手一人だ。ただし、射手はほとんど攻撃には参加しない。射手の主な役割は索敵と指揮だな。と、いうわけで射手のリデルの言うことには従うんだぞ？」

と、ケントが説明を始める。

頷いたウォルトを見て、リデルが

「よし、じゃありデル班、しゅっぱーっ！」

と、元気良く言った。男達はおー！とそれに続く。

ウォルト達一行は、薄暗い森の中に消えていく。ヴァンは彼らを見送った後、守護者の家へ向かうのであった。

27話 剣と獵師

薄暗い森の中は視界が悪い。もう少し経てば日が昇るので少しは明るくなるだろうが、ウォルトを除いた三人は何事もないようにスイスイと進んでいく。ウォルトだけが、彼らのペースに追いつけずに少し遅れ気味になっていた。

「と、ところで、どこに、向かってるんだ？」

足元に注意しながら、自分の目の前を進んでいるリデルにウォルトが聞く。リデルは、少し速度を緩めてウォルトのペースに合わせながら、彼の質問に答えた。

「着いてのお楽しみだよ！」

リデルは意地の悪い顔をしながら再び速度を上げていく。薄暗い森の中で簡単に速度を上げていくリデルを見て、ウォルトは舌を巻いた。リデルの前にいる他の二人にいたっては、足元を見ることがなく進んでいる。

そんな彼らに気をとられていたウォルトは、足元にあつた植物の茎に足を引っ掛けて転倒しそうになる。なんとか体勢を立て直したウォルトは、足元を眺める作業に戻った。

何事もなく進んでいったウォルトは、だんだんと、獣の鳴き声と薄い血の臭いを感じるようになった。獣同士が争っているのだろうか、と思いつつながらその方向へ足を進める。そして、ウォルトの初の狩猟が始まった。

リデルの前にいるケントとライドが立ち止まる。それを合図のようになり、ウォルトも止まって、ウォルトに向かって小さな声で、止まって、

と言った。素直に従うウォルトにリデルは片目を閉じて微笑んだ。

「静かに近寄って、あれを見てみて」

リデルに言われたウォルトが、息を殺しながら木の陰から顔を出す。するとそこには、争っている大量の獣達がいた。そのほとんどが山犬だったが、一匹だけ違う獣が混ざっていた。その一匹は、地面に倒れていてもう動かない。よく見ると、それを境目に獣達が争っているようだった。

「思わぬ幸運だな！持って帰るとき面倒そうだが」

ケントが小さい声ながらも大きな喜びを隠さずに言う。ライドは特に反応はしていなかった。

「じゃ、ライドは左、ケントは真ん中、ウォルトは右ね。合図と共に行くよ！」

「合図って何？」

ウォルトがそう尋ねると、リデルはその答えだと言わんばかりに、素早い動きで弓に矢をつがえた。合図を理解したウォルトは、放たれた矢と一緒に獣の群れの中に突進を始めた。

突然の闖入者に驚いた獣達は、その隊列を崩す。二つの群れのぶつかる地点、リデルの言い方と言えば真ん中、に突っ込んだケントは、そのナイフを一番近くにいた右側の一匹の首に突き刺した。彼の肘から指先あたりまでの長さのナイフが、その獣の体へ飲み込まれていく。ナイフを持つ手と、獣の毛が触れ合う程に押し込むと、次は一気にそれを引き抜いた。すると、ナイフを飲み込んでいた部分からどす黒い血が溢れ始めた。

致命傷を負って動きの鈍ったその獣に、ケントはトドメとばかりにその頭をナイフの柄で殴打した。その獣は地面に倒れたきり、動かなかった。

ライドは、左の群れの中で一際大きい獣に、素早く近寄る。そして、そのまま綺麗な動きで、その獣の背に飛び乗った。突然彼に乘られた獣は、自分の背にまたがる男を振り落とそうと暴れ始める。しかし、その抵抗も空しく、ライドの正確な一撃がその獣の頭部を襲った。

暴れる獣から飛び降りたライドは獣の群れから距離をとる。すると、左の獣の群れはすくすく撤退していく。ライドもそれを追うことはなく、左側には頭にナイフが突き刺さったまま死んでいる獣だけが残された。

ウォルトは、ナイフの短さに手間取っていた。白い剣と同じぐらいの重量なのに、ナイフは刀身が短く、白い剣を使っていたときの間合いで距離をとってしまう。その為、ナイフが獣の身体に触れることはない。焦り始めたウォルトは、何とか攻撃を届かせようとして狙った獣に向かって接近を試みる。急に距離をつめてきたウォルトに、獣は反射的に飛び掛った。ウォルトが狙っていた獣は、少し小さめの体つきをしていて、激しくぶつかり合ったウォルトと獣の膂力は拮抗していた。

しかし、ウォルトにはナイフが一本に対して、獣のほうには鋭い爪と牙がある。自分の皮膚が破られる感触に顔をしかめながら、目の前の獣の隙をついて、正面からナイフを突き刺した。ナイフを獣の体に押し込むのは、白い剣で斬る時とは違って、かなり力を必要とした。いつもより強く感じる肉を切る感覚と、体に走る痛みにウォルトは顔をしかめた。

しばらくして落ち着きを取り戻した右の獣の群れは、一番大きい獣を先頭にして逃げていった。あとに残されたのはウォルト達と、三匹分の山犬の死体、最初から倒れていた獣だけになった。

「よし、帰るぞー！ライド、二人でそれ運ばうぜ」

ケントが、ライドの仕留めた一際大きな獣を指差しながら言う。ライドは無言で前足の方に移動すると、腰を沈めて待機し始めた。それを肯定と捉えたケントが後足を持ち上げると、ライドもそれに合わせて立ち上がった。重たそうな大きい獣を二人で運び始めた二人に、ウォルトは瞠目した。

「じゃあ、あたし達はこれね？」

呆けるウォルトにリデルが言う。彼女の指しているこれ、とはもちろんウォルトの仕留めた小さめの獣だ。

「でも、その前にすることがあるわねー。腕、出して？」

ウォルトは素直に傷ついた腕を見せる。すると、リデルは腰につけている革の袋を取り出す。そしてその中身をウォルトの傷口に浴びせた。その痛みにウォルトが顔をしかめると、リデルが安心させるような口調で

「大丈夫、ただの水だから。軽い手当てよ」

と、傷の手当てをしながら言った。リデルは、自分の着ている服を少し破ってウォルトの傷口を保護した。おかげで、彼女の性格とは正反対の奥ゆかしげなへそが姿を現していた。

ウォルトの傷の手当てを終わらせたリデルは、ウォルトに向かって片目を閉じて微笑んだ。

「さ、これで大丈夫だから、さっそく働いてもらおうかな！」

明るい調子で言うリデルにウォルトは素直に頷いた。

28話 剣と協力

ウォルトとリデルは、先に獲物を持ち運んでいった二人に追いつこうと必死にウォルトが仕留めた小さめの獣の死体を運んでいた。ウォルトはこれまでその場で解体して食べていたため、初めての獲物の運搬に戸惑っていた。それに加え、腕の痛みやリデルのへそが彼の集中力をじわじわと削っていた。

足をとられないように注意しながら、ウォルトが足を動かしていると、肩に何かが飛び乗った感触があった。もう慣れたこの重さに、視線は足元のまま水黽に心の中で話しかけた。

（どうした？何かあったか？）

（はい。実は、異形の気配を感じたのでウォルトさんにも知らせようと思って）

異形、と聞いたウォルトは少し眉をひそめる。先行しているケント達は大丈夫だろうか、と不安がよぎった。そして、こころと表情を変えるウォルトを不思議そうに見ているリデルに、このことを伝える。

「リデルさん。異形が近くににいるらしい。どうする？」

異形が出た、と急に言い出したウォルトに、リデルは面食らった。しかし、すぐに表情を戻す。

「それ本当？セラちゃん以外に異形を感じることが出来る人なんて初めて見たよ。とりあえず、あの二人と合流しよ。これは木の上にでも置いとこ」

「あ、いや、俺じゃなくてこの肩に乗ってる水黽が教えてくれたんだ」

「へえーそうなんだ。また後から詳しく聞かせてもらうわよー」

リデルはそう言って、登り易そうな木を探し始めた。リデルの誘導にしたがって、ウォルトは獲物をその木の下まで運ぶ。

「じゃあ、頑張って下から押し上げてね。後は何とかするから」

リデルは獲物を持ったまま器用に木を登っていく。木の上でリデルが片目と閉じて合図したのを確認したウォルトは、全力で獲物を下から押し上げた。二人で奇声を発しながら獲物を木の上へ運んだ。リデルは、上手に獲物を木の上に固定すると、木から飛び降りた。そのまま、近くに生えている青い植物を薙り取ると、獲物の上に振りかけた。

「この葉っぱは、獣が嫌がる臭いを出すの。さ、早くあの二人に合流しましょー！」

既に明るくなりつつある森の中を、ウォルトとリデルは走り始めた。

ウォルトは、異形の気配の方へ近付けば近付くほどに積もっている嫌な予感を振り払いながら走っていた。足を引っ掛けそうな植物がないことを確認したウォルトは、なんだか今日は焦ってばかりだな、と溜息をついた。

異形の声が聞こえる範囲まで近付くと、リデルが険しい顔をして

いることにウォルトは気が付いた。

「異形と戦ったことはあるのか？」

ウォルトがそう問いかけると、リデルの表情が険しい顔から先程までの明るい顔に戻る。

「見たことはあるけど、戦ったことはないよ。異形と戦うのは街を守護する民の役目だからね。」

リデルはそう返すと、また元の険しい表情になった。それから、二人の間に会話はなく黙々と異形の方へ近付く。近くで木が倒れる音がする。どうやら既に誰かが異形と戦っているようだった。

ふと、ウォルトとリデルの目の前の木の方向から、風を切る音が聞こえる。次の瞬間、木の幹を何かが貫通してウォルト達に襲い掛かった。二人は、倒れてくる木と飛来した何かをなんとか回避した。そして、倒れた木の向こうに今の現象を引き起こした者の正体を見た。

銀色に輝く鎧を全身に纏う異形とライドが戦っている。異形は、硬い物と硬い物がぶつかり合うような音を出しながら、ライドに襲い掛かっている。異形の右腕は、途中から弓のような形状に変化していて、その弓には鎧と同じ色の銀色の矢がつかえてあった。その銀色の矢の矢じりは、槍の穂先のように大きく、長い。まるで槍をつがえているようだ。銀色の槍を弦にかけたまま、それを振り回してライドに傷を負わせようとしている。

左腕は、先の方が大きな盾に変化していて、如何なる攻撃をも通さないような輝きを放っている。しかし、地面とガリガリ、と削りながら動かしているようだった。銀色の鎧に包まれている異形は、人と同じような大きさなのに対して、銀色の盾はあまりにも大きな

ったのだ。

一人で対等に異形と渡り合うライドの後ろには、倒れているケントがいた。どうやら、ケントが傷を負って動けない状態になったらしい。

「ウォルト、ライドの加勢をしてあげて。ライドならきつと息を合わせてくれるわ。あたしはケントの手当てをするから」

ウォルトはリデルに頷くと、背中の白い剣を引き抜く。

「ライド！加勢する！ケントのことはリデルがやってくれる！」

ライドはウォルトを一瞥すると、異形と距離をとった。急に距離をとったライドに異形が右手の弓につがえてある槍のような矢を放つ。ライドは軽い動きでそれを避ける。地面に当たった矢は、舞い上がった土埃の中へ消えた。しかし、異形の弓には、銀色の輝きと共に新たな矢が生み出されていた。

「分かった。俺に構わず、敵だけに集中しろ」

ライドの声は静かだったが、その赤い髪と瞳は轟々と燃えているようだった。彼の纏う雰囲気、ウォルトは安心感を覚えた。この男の言ったとおりのことをしていれば大丈夫だ、という感覚に包まれる。ウォルトは、異形がライドに槍のような矢を振り落ろした隙を狙って異形に接近を始めた。

ウォルトの接近を見た異形は、その盾をウォルトの方に向け、どつしりと構えていた。銀色に輝く大きな盾に向かって白い剣を振り下ろす。白い剣はやすやすと盾を斬り裂くと、じわりと淡い桃色に

染まる。盾の断面からは異形の赤い血が流れ出ていた。

盾を斬られたことで異形がウォルトに意識を向ける。すると今度は、ライドが異形の右上の鎧の僅かな隙間にそのナイフを差し込んだ。異形が、生き物とは思えない程気味の悪い叫び声をあげる。次の瞬間、ウォルトとライドを突風が襲った。周りの木々も薙ぎ倒されていく。

吹き飛ばされた二人が、遠くから異形の様子を確認する。すると、異形は奇怪な音と共に変化していく最中だった。

銀色に輝く鎧のような物を身に纏っていた人の形をしていた異形は、その背から真っ黒で所々に赤い筋のある禍々しい翼を生み出していた。翼の膜が、手や足とつながっていく。その黒い翼に侵食されたように、銀色の輝きを放っていた鎧も黒く染まっていく。弓や盾といった手の先にあつた武具は消え、黒い翼と一体になる。黒い翼の端々には鋭利な爪が見えた。

「あ、あれは……」

後ろから声が聞こえたウォルトはその方向へ振り返る。すると、そこにはガレンを筆頭にした町を守護する民達がいた。彼らは、あの黒い異形の姿を見て声を失っているようだった。

既に太陽は完全にその姿を現し、黒い異形を照らす。太陽に照らされた黒い異形はその禍々しい口を開く。その中には赤く光る鋭利な牙があり、血の様な赤い液体な滴っている。そして、明るくなつた森の中に黒い異形の咆哮が響き渡った。

29話 剣と恩

「ひるむな！散開の陣形をとれ！」

ガレンの叫び声で我を取り戻した町を守護する民達が動き始めていく。前衛達は、じりじりと距離を縮めていく。射手達は、矢を手に取りながら散っていく。ウォルトがどうしようか迷っていると、リデルが駆け寄ってきた。

「ウォルト、あとは彼らに任せていったん退こう？ライドやケントも、もう退かせてるから」

ウォルトと共に突風に吹き飛ばされたライドは無事らしい。そのことに安堵して、ウォルトもここから退こうと思ったその時だった。淡い桃色の剣が重い声を出した。

（主、ここは退いてはならぬ。彼らでは奴には敵わない。奴は今まで主が倒してきた異形とは別格だ。奴から町を守る為には我の封印の力が必要になるだろう。きっと我が半身が主に力を貸してくれるはずだ。幸運を祈る）

堰を切ったように淡い桃色の剣が話す。彼の言葉に嘘や偽りが無いことをウォルトは知っていた。自分の盟約者が言うには、あの黒い異形を退けることが出来るのは自分達だけ、町を守る為に戦おうと、ということらしい。そしてウォルトは、世話になったこの町を守ることに決めた。

シーニアの町は、初めの方こそウォルトと殺そうとした。しかしシーニアの町は、ウォルトが自分は異形ではない、という信じるに

は無茶があることをすんなりと受け入れてくれたのだ。その上、この服や鞄も与えられた。この分の働きはまだ出来ていない、とウォルトは思っていたのだ。

そして、ウォルトの中で恩を仇で返す、という行動は禁忌に値していた。村での事件は、彼に深い傷を与えた。そんな傷の痛みを知っている自分が、同じ痛みを他の人に与えることなど出来ない。

ウォルトは淡い桃色の剣と共に、黒い異形に向き直る。

「リデル、ごめん。ここは退けない」

止めようとするリデルを振り切つて、ウォルトは前線へと走つていった。前衛達の方へ走りこんでいくウォルトを見付けたガレンが叫ぶ。

「ウォルト、何やってる！退け！」

「駄目だ！こいつは俺がやる！」

射手達が一齐に矢を放つ。黒い異形をその大きな翼が包む。ほぼ全ての矢が、黒い異形に命中し、黒い異形を守るように包んでいた黒い翼に傷を与える。矢が貫いた部分からは、どす黒い血が溢れて地面を黒く染めている。全ての矢を受けきつた黒い異形は、その翼を大きく広げた。

——いかん。主、伏せろっ！

ウォルトは、咄嗟にその場に伏せた。次の瞬間、黒い異形の羽ばたきと共に烈風が発生した。じりじりと距離をつめていた町を守護する民の前衛達が、烈風によって吹き飛ばされていく。ウォルトと

止めようとしてウォルトと対峙していたガレンも、抵抗も空しく吹き飛ばされた。黒い異形に変化したときの突風によって倒れていた木々が、踏まれて倒れていた草がさらに踏まれるように蹂躪される。その烈風を耐えたウォルトが立ち上がると、黒い異形がまるで戦場は整えた、と言わんばかりにウォルトの方を向いて待っていた。いや、もしかしたらこの盟約者の方を向いているのかもしれない。

——行くぞ、主。

剣がそう言うのと、ウォルトは、自分の体に異形の力が流れ込んでくるのを感じた。それと同時に肩に乗っていた水黽の気配が消える。黒い異形は、ウォルトの異形の力の封印が解かれたのを感じたのか、警戒しているように見える。そんな黒い異形に、ウォルトは異形の力で強化された脚力を使って一気に距離をつめた。

ウォルトの飛び込み斬りを、先程までは攻撃を避けもしなかった黒い異形が、初めて身を逸らしている。そして、ウォルトの伸びきった腕を狙って、左翼の爪を振り下ろす。ウォルトの目はそれを捉え、異形の爪が届く前に後ろに跳んだ。

しかし、黒い異形の攻撃は止まらず、着地したウォルトを右翼の爪が襲った。剣を合わせてその攻撃を受けようとすると、黒い異形はいきなり攻撃を止めて、距離をとった。どうやら、この剣を警戒しているようだった。

今度はウォルトの方から距離をつめ、横薙ぎに剣を振る。黒い異形はそれを上空に飛ぶことで避けた。そのまま、ウォルトに向かって滑空していく。剣での防御が間に合わず、その体当たりをウォルトは受けてしまった。土埃が舞い、彼らの戦場を覆う。そして、強烈な風が土埃を払って黒い異形とウォルトの姿が再び見える。

ウォルトの右足が妙な方向に折れ曲がっている。しかし、あつと

いう間に元に戻っていく。黒い異形がそれを妨害しようと爪で引っ掻こうとするが、剣を使い必死に耐える。右足が完全に回復したウォルトは、剣をしっかりと持ち直す。

「どうやら簡単には触れさせてもらえないみたいだ」

——ああ。奴は私の恐ろしさを知っているだろう。何せ、半分同類なのだから。

ウォルトはその言葉に、え。と返そうとしたが、その先が続かなかった。黒い異形の爪が、深深とウォルトの腹に刺さっていた。爪の刺さっている場所から、鮮血が滴り、痛みがウォルトの意識を削る。このまま、意識を落としそうになったウォルトは、目の前で燃えている黒い異形を見た。

（ああ、まばろしか……）

次の瞬間、そのまま意識を落としそうになったウォルトを一喝するかのよう、大きな炎がウォルトと黒い異形を包んだ。

熱で意識を取り戻したウォルトは、必死に後ろへ跳び退いた。腹に感じていた異物感が消え、異形の力がそこへ集まっているのを感じる。熱に苦しむ黒い異形は、乱暴に暴れ始めた。そこらじゅうに翼を打ちつけ、地面に窪みを作っていく。そして、燃える視界の中ウォルトが見たものは、異形の爪が自分に向かって振り下ろされる光景だった。

30話 剣と別れと新月の象徴

ウォルトと同じように燃えている黒い異形が乱暴に振り回す大きな鋭い爪が、ウォルトに向かって振り下ろされる。その黒い異形の一撃は、先程までの一撃と同じように地面に窪みを作った。ウォルトが強い風を感じて目を開けると、黒い異形が遙か下の方で燃えている。ウォルトは、空を飛んでいた。

いや、正確に言うと、空に飛ばされていた。異形の力を大量に使ったウォルトは、一箇所に大量に集まる魔を感じて、その場所を見る。するとそこには、黒髪の少女がいた。彼女の纏う魔が薄い緑色のように今のウォルトには見える。

そして、燃えている黒い異形に注目している町を守護する民の中で一人だけ、別の方向を向いている男がいた。その男はおもむろに木の枝を拾うと、薄い緑色の魔を纏う少女に向かって投げつけた。その行動は、遙か上空にいるウォルトからは一目瞭然だった。

ウォルトが一箇所に集まっていた魔の消失を感じる。ウォルトがその方向を見ると、先程までその中心にいた黒髪の少女が自分に向かって飛んでいるのを見付けた。それを避けられないと判断したウォルトは、彼女を受け止めることに決める。剣を片手で持ち、空いた片手で受け止める。黒髪の少女は、ぎゅっとつぶっていた目を開く。半開きの目でウォルトを見た少女は、落ち着いた声で言った。

「あなた、熱い」

ウォルトは、先程まで本当に燃えていたから当たり前だった。しかし、そんなことを言ってる場合でないと判断したウォルトは、どうにかして彼女を安全に着地させる方法を考えていた。何も言わないウォルトに抱きかかえられている少女は、舌打ちを一つすると、気を失った。

ふと、ウォルトの視界の端に、ひとすじの金髪のようなものが映った。それはだんだんと大きくなり、ウォルトに向かって高速で接近している。その姿を確認したウォルトは、そういえば、まだ恩を返していない奴がいたな、と思った。

その金色の獣、オサキは空中にいたウォルトに向かって跳びかかる。その意図を理解したウォルトは、オサキに黒髪の少女を預ける。オサキは空中で彼女を口で啜えて、華麗に着地する。続いてウォルトも、地面に小さな窪みを作りながら着地した。

「どうやら、多少は成長しているようだな、少年。異形に堕ちずに人の道を進んでいることを嬉しく思うぞ。まあ、今は異形の方に大きく傾いているようだかな。どれ、少し手を貸してやるか」

黒髪の少女を地面に置いたオサキは、何でもないことのように話し始めた。言葉を話す獣に慣れていたウォルトは、多少動じるだけで済んだが、町を守護する民達は固まってしまっている。そうさせた張本人はまるで気にしていない様子で、燃えて暴れる黒い異形を睨んでいる。

「止まれ、新月の象徴。今は汝が時ではあらぬ。暫し其のまま待つて貰おうか。次の新月が来る時まで」

ウォルトの目には優雅に揺れるオサキの尾が複数に分かれたように見えた。

暴れていた黒い異形の動きが、だんだんと鈍くなっていく。オサキが作ってくれた隙を生かす為、ウォルトが黒い異形に盟約者である剣を突き刺そうと近付く。

——主、暫しの別れだ。また、会おう。

剣が落ち着いた声で言った。しかし、ウォルトはその言葉を流すことなど出来ない。

（どういうことだ？）

——我と最初に会った時を覚えているか？

ウォルトは、剣を初めて見た時のことを思い出す。そういえば、剣は異形の背中に刺さっていて――

そこまで思い出したウォルトに、剣が言葉を続ける。

——思い出したか？何、心配するな。決して会えぬ訳ではない。主は人でも異形でもないのだからな。

どうやら、今の剣はウォルトのことを思っただけでわざわざ人扱いするようなことはしないしかった。今の剣は事実をそのまま彼に伝えていた。

——大丈夫だ。今の主は決して独りではない。相手を裏切らないというその心意気、決して忘れるな。

剣はそう言ったきり、喋らなくなった。ウォルトがいくら問いかけても無駄だった。実は、この盟約者は相当頑固者だということに今さら気付いたウォルトは、心を決める。弱弱しく動き出した黒い異形に向かって、ウォルトは歩き出した。

ウォルトが目覚めると、見慣れた天井が見える。ウォルトは体を起こすと、ヴァンがウォルトの隣で座って寝ていることに気付いた。どうやらウォルトのことを見守っていてくれたみたいだ。ウォルトが起きたことで、ヴァンも目を覚ます。

「お、起きたか。さ、何をやらかしたのか教えてもらおうか」

ニコニコとしたヴァンに詰め寄られたウォルトは、剣との出会いと金色の獣のことを話した。ウォルトが自分でも異形でもないことを正直に話したのを聞いたヴァンは、なぜか満足そうに頷いていた。そして話は、黒い異形との戦いに移る。

黒い異形の乱暴な一撃から身を守った風の話を話すと、ヴァンはどこか自慢そうに言う。

「それはセラだな。シーニアの町の魔法使いだ」

「そうなのか。もしかして、俺が受け止めたあの少女か？」

「そうだ。もう目を覚ましているぞ」

自慢そうな顔は一瞬で消え、だんだんと曇っていく。あの時と同じ顔だ、と、ウォルトは気付いた。あの時は話してくれそうにもなかったが、今は話してくれる気がしたウォルトは、その話を掘り下げた。

「なあ、何でヴァンは町を守護する民に移ったんだ？」

その問いかけに、ヴァンはひどく驚いた様子を見せる。

「もしかして、あの少女と何か関係があるんじゃないのか？」

「やれやれ、まあ、ウォルトの話も聞かせてもらったし、俺の話もしょうか」

初めて会った時のような誠実そうな表情を浮かべて、ヴァンは話し始めた。

「あいつは、俺の妹だ。あいつは早くから町を守護する民の一員だった。何故なら魔法使いの才能があつたからだ。そして、俺の親父も町を守護する民だった。そしてある時、手強い異形が現れたんだ。セラは、襲われた俺の親父を助けることが出来なかった。集中が乱されて魔法が暴発したらしい。それから、セラがこの家に帰ってくることはなかったんだ」

この家の広さの謎が解けた気がした。そして、あの少女が飛んできた理由も。

ヴァンは、ウォルトと視線を合わせようとはしない。そんなヴァンを見たウォルトは、空中で見たあの光景を思い出した。

「なあ、俺、あの少女に木の枝を投げた奴を空中で見てたん……」

「なっ！どこのどいつだ！」

素早く反応したヴァンは、目を血走らせながらウォルトに詰め寄った。詰め寄るヴァンを抑えつつ、ウォルトは記憶を辿る。どこかで見たようなあの男。どこで見たのか……。

冷静さを失ったヴァンの顔が余りにも近く、顔を逸らしたウォルトの視界にヴァンの家の壁にかけてある弓が映った。

そして、思い出した。あの雰囲気は……。

「ヴァン、最初に俺を殺しに来たとき、弓を扱っている奴がいただろ。そいつだった」

それを聞いたヴァンは、物凄い勢いで家を飛び出していった。取り残されたウォルトは、まだ事の重大さには気付いていなかった。

ヴァンを追おうとして立ち上がったウォルトは、いつもの動作で剣をとろうとする。しかし、手は空を切る。ウォルトの目には、自然と涙が浮かんでくる。

もう自分の盟約者はいない。そのことを思い知ったウォルトは、しばらく独り、ヴァンの家で佇んでいた。

31話 剣と家主

一人用の家は、二人で使うには狭かった。この家の主には悪いことをしているな、とウォルトは思う。しかし、この家の主がそんな表情を浮かべたことは一度もなかった。そもそも彼は表情自体がまったく動かない珍しい人物だった。

黒い異形を封印した日に、ウォルトの生活は大きく変わった。ウォルトが目覚めた時、勢い良く飛び出したヴァンは、その日帰ってくることはなかった。ウォルトも自分の盟約者を失ったことで、何をする気力も起きずにずっとヴァンの家で佇んでいた。

次の日、ヴァンはセラとガレンを連れて帰ってきた。ガレンはウォルトの姿を見るや否や、開口一番に謝罪を始めた。剣を失って呆けていたウォルトはその光景を理解するのに少し時間を要したのだが、その間もずっと頭を下げていた。

「俺は……お前のことを思い違えていた。お前は異形でも何でもない。ただの義理堅い男だった。お前の戦う背中から、そう感じたんだ」

疑って済まない、と続けるガレンに、ウォルトは落ち着いた声で言った。

「……剣は、どうなった？」

「黒い異形と共に消えた」

その問いに答えたのはセラだった。眠たそうな目でウォルトの方を見ている。ウォルトが暗い表情になったのを見たセラは舌打ちを

一つして続けた。

「助けてくれてありがとう」

「あ、ああ」

セラとしては、自分のことをつけ回していた男を知らせてくれてありがとう、と言ったつもりだったが、ウォルトはそれを空中から安全に降ろしたことに對してのものだと勘違いしていた。

「ウォルト、もし良かったらこの村に住まないか？」

そう問いかけたのはヴァンだった。ヴァンは真剣な表情でウォルトを見据えている。冗談や狂言の類ではなさそうであった。しばらく答えを出せずにいたウォルトにヴァンが追撃をかける。

「実は今、ウォルトのために町の職人が武器を作り始めているんだ。それが完成するまでここにいる、っていうのはどうだ？」

ウォルトは黙り込んでしまった。あの剣を失った後すぐに新しい武器を持つことに對する後ろめたい気持ちと、この先武器無しでは何も出来ない、という葛藤に苦しんでいたのだ。何も言わないウォルトを、ヴァンが固唾をのんで見つめている。そして、一人の女性の声がこの雰囲気をぶち破った。

「あ、ウォルト。あ、ヴァンにセラにガレンもいる。そんなところでどうしたの？」

ウォルトはこの明るい声に聞き覚えがあった。この四人の空気の中を勇敢に突き進んできたリデルは、ヴァンとセラが並んで立って

いることに目を疑っていた。

「ん！？ヴァンと……セラ？一体どうしたの？」

慌てているリデルに、セラが突進して抱きついた。セラの頭はリデルの小さな胸にすっぽりと収まっていた。そんなセラの頭を、リデルが優しく撫でる。

「ちゃんと、話した。仲直りできた。今まで泊めてくれてありがとう。私、この家に帰る」

なんだか、母と娘の様で微笑ましい風景だった。しかし、セラの標的がウォルトに変わると、その雰囲気は一変した。

「ウォルト。交替。今日から私が兄さんの家に住むから、リデルの方に泊まっていいよ」

とんでもないことを言い放ったあと無言の圧力をかけてくるセラに、ウォルトは何も言えなかった。ただ頷くしかなかった。セラの威圧感には逆らうことが出来なかった。

しかし、リデルの方はというと、少し困った顔をしていた。

「え、いやゝ。ウォルトも困るよね？」

困ったように笑っているリデルが、ウォルトに話を振る。その両者の反応に、ウォルトは最善の策を思いついた。

「じゃあ、今日から町の周りで野宿するよ。それでいいか？」

リデルは安心したように、ほっと吐息をもらした。しかしセラは

何故か舌打ちをしていた。

「いや、野宿なんてさせられない。ウォルトが出て行く必要なんてないと思うんだが……」

ヴァンがウォルトに助け舟を出そうとする。しかし、もう手遅れのようなだった。セラの表情がだんだんと険しくなっているのを見たリデルが慌てて言った。

「そ、そうだ！ヴァンの家でもなく野宿でもない場所に心当たりがあった！ちよつと、ついてらっしゃい」

リデルがウォルトの手をつかんで強引に引き摺っていく。申し訳なさそうな顔をして二人を見送っていたヴァンにセラが満面の笑みで言った。

「良かった、これで、二人だね」

そんなセラに、ヴァンは困ったような顔をするしかなかった。昔の兄妹の様子を知っていたガレンは、何も言わずにそれを見ていた。しかし、その表情は温かく、懐古の念を感じられた。

ウォルトは、リデルに引き摺られた結果ある一軒の家に辿り着いた。ヴァンの家と比べて小さく、小ぢんまりとした印象を受ける。リデルが乱暴に扉を叩くと、家の中から出てきたのはライドだった。

「ウォルト任せてもいい？どうせ一緒に狩猟するからいいよね？」

リデルが縋るような目付きをライドに向ける。そんなリデルを見

たライドは、事情を察したらしくすんなりと頷いた。余りにも簡単に受け入れたライドに、ウォルトが驚いて問いかける。

「いいのか？」

「ああ」

彼の答えは簡潔だった。

ライドがウォルトに家の中に入るように促す。ウォルトが初めて踏み入れたライドの家の中は、物が丁寧に整理整頓されていて、見た目より広い家のように感じられた。しかし、二人で住むとなると窮屈な感じも否めなかった。

しかし、当の本人はそれをまったく気にしていない様子で、ウォルト達が訪ねる前にしてしたのである。ナイフの手入れを再開していたのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7076x/>

欠けたままの月

2011年11月17日09時57分発行